

上海戦に輝く皇軍の面目

特別大演習統監部

昭和八年十月
代勝 寫

序

昨年二月、三月の頃上海附近の戦鬪に於て我が上海派遣軍の主體となり、一は真正面より一は側背より相協力して支那軍を夾撃し、遠く之を西方に撃破し以て皇軍出動の目的を達成した第九師團及第十一師團が、今回福井地方に於て行はるゝ陸軍特別大演習に當り南北軍に分れて 陛下の馬前に於て其武を競ふことゝなつた。

誠に奇しき因縁であり又誠に其意義深きを覺ゆる次第である。南北兩軍参加將兵は恐く上海戦に於て支那軍を撃滅した當時の夫の意氣と其儘の動作とを以て福井の野を縦横に馳驅し、そして我が國民の前に上海戦の壯烈なりし其様を髣髴せしめ、國民の信頼する皇軍の

實相を御目にかけるであらうと我等は深く期して居る。 二

而して今茲に本小冊子を頒布する所以のものは、此の武勳赫々たる
兩師團により特に無数の上海戦の勇士を出しある此の福井地方に
於て本年度特別大演習が舉行せらるゝに鑑み、江南の華と散つた我
が戦友の忠勇美談の一部を掲げ、以て國民同胞と共に其の不滅の勳
を稱へ、我等の是等忠勇なる戦歿將兵に對する尊敬感謝の念を捧げ
以て勇士の靈を慰めんと希ふが故である。

尙本冊子は上海戦に關する忠勇美談中特に第九師團及第十一師
團の戦死者の分のみを、而も極く其の一小部分を収録したもので
ある。六百數十名の戦歿者並生存者が之と同様、或はより以上の目
覺しき働を爲したことは申すまでもなく、唯其全部を掲載し得ざ

るを遺憾とする。

尙本冊子に収録せる忠勇美譚は教育總監より 天皇陛下に献上
し奉つた教育總監部編纂『滿洲事變忠勇美譚』中より拔萃せるも
のである。

昭和八年十月

特別大演習統監部

上海戦に輝く皇軍の面目

目次

第九師團の部

- 一、身に三弾を受け、鐵帽を脱いで起ち上り恭しく陛下の萬歳を三唱す
(中島上等兵) 一頁
- 二、今日の攻撃には必ず一番乗をするのだ(西村伍長) 二
- 三、進んで斥候を志願し運命を共にす(野路伍長、新貝上等兵) 三
- 四、小隊長の旺盛なる攻撃精神突撃成功の因をなす(臼井中尉) 八
- 五、進んで難局に當る(安立伍長) 一〇
- 六、鬼神の如き威の蔭に閃く人格(仲下中尉) 一二

七、死して尙銃を離さず(本匠上等兵)	一三
八、率先斥候に出でて危地に臨む(野中少尉)	一五
九、喇叭を口に當てた儘戦死す(向井上等兵)	一六
一〇、君國の爲生命を捧ぐるは無上の光榮(笛吹上等兵)	一八
一一、射撃號令を呼びつゝ、戦死す(三反崎中尉)	二〇
一二、獨斷百米を躍進して攻撃作業の據點を構成す(岩尾上等兵)	二四
一三、俺は昭和の木口小平になるのだ(西出上等兵)	二六
一四、幽明の境にあつて只管中隊長及部下を念ふ(中村軍曹)	二七
一五、分隊は此處に全滅するとも銃を敵に渡すな(高倉曹長)	二九
一六、俺の銃は何處だ、銃をかせ、早く〜、銃は軍人の魂だ(山本上等兵)	三一
一七、頭部に致命傷を受け乍ら敵情視察を止めず(土肥曹長)	三三
一八、分隊前へ!(寺居伍長)	三五

一九、新妻を離婚して決死の出征、戰場に於て骸となるも堅く銃把を握つて離さず(林上等兵)	三七
二〇、其身重傷を受くるも猶己の任務たる負傷兵の後送を氣遣ふ(若原一等兵)	四一
二一、分隊團結の鞏固(田中軍曹、清水伍長)	四二
二二、教官と教へ子相擁して戰場に斃る(山本中尉、大鹽伍長、森口伍長)	四四
二三、勝つたか否か(羽瀬上等兵)	四七
二四、中隊長の安否を思ふ傳令の最後(田部伍長、北川上等兵)	四九
二五、之で満足だ、少しは名譽を恢復し得たであらう(田中上等兵)	五四
二六、天皇陛下萬歲!山口、塚田、山口……………口……………(小杉伍長)	五七
二七、死に瀕して戦友の安否を氣遣ふ(高橋伍長)	六一
二八、父に會ひたくば靖國神社に來れ(酒井少佐)	六二

- 二九、死を以て突撃路を完成す(五十里上等兵)……………七〇
- 三〇、死の直前従容として最後の一弾を發射す(漁上等兵)……………七二
- 三一、戰場に於ける兄弟の生別死別(永井伍長)……………七四
- 三二、小隊の前進が困難になると常に散兵線前にとび出して激勵す
(裏少尉)……………七六
- 三三、機關銃手の本懐、死せども銃把を離さず(櫻井伍長)……………七八
- 三四、引鐵に指を掛けた儘、床尾を肩に据えた儘(北村伍長)……………八〇
- 三五、なわに敵彈の二發や三發、此時機に縋帯なんかして居られるかい
(堀田伍長)……………八一
- 三六、眞の勇者は情に厚く、義に強し(岡田伍長)……………八二
- 三七、此彈丸を……………早く……………送つて呉れ(實田一等兵)……………八五
- 三八、最期の叫び『後脚の位置』(矢田部上等兵)……………八七

- 三九、看護兵負傷せる戰友の爲掩體を構築中敵彈に死す(山形三等看護長)……………八九
- 四〇、壕の一角に腰を下し、敵彈下に作業を指揮す(山田軍曹)……………九一
- 四一、闇夜敵彈下を駆ける黒い影(東野曹長)……………九三
- 四二、突入する隊中長の背後に聞えた『天皇陛下萬歲』(小野伍長)……………九六
- 四三、先づ俺が一番に戰死する覺悟だ(中嶋伍長)……………九八
- 四四、小隊長たる義兄の重傷を見つゝ、依然射撃を繼續す(中村伍長)……………一〇〇
- 四五、自己の重傷を忘れ上官を思ひつゝ、戰死す(後川上等兵)……………一〇二
- 四六、電話必通の信念(上出上等兵)……………一〇五
- 四七、危険を冒し分隊長單身敵斥候を捕獲せんとす(柿本伍長)……………一〇八
- 四八、部下を脊負ふて共に敵彈に殞る(森下軍曹)……………一一〇
- 四九、空閑大隊長の身邊を護つて殞れ、死に臨み報國の念に燃ゆる遺書を
認む(寺本伍長)……………一一二

五〇、死所を同うせる戦友(梶伍長、松原上等兵) 一四

五一、戦友を救はんとし折り重つて殞る(松村上等兵) 一七

五二、砲車の側にて戦死したい(吉田伍長) 一八

五三、死を以て顯はした通信手の責任觀念(道場上等兵) 二三

第十一師團の部

五四、死するも猶毅然として銃を保持す(藤目上等兵) 二五

五五、予が戦死の後は一兵に至る迄此國旗を身代りとして先頭に樹て、進
め(三木少尉) 二六

五六、堅き信念に身命を捧ぐ(梶原伍長) 二八

五七、自重して有事に備へ、潔く死處を戰場に求む(神ノ倉伍長) 三一

五八、此母にして此子あり(島内上等兵) 三二

五九、戦場の勇士は孝子の門より出づ(湯淺伍長) 三七

六〇、果斷敵の自動小銃を奪取し、更に奮戦一死克く重任を果す
(平野中尉) 四〇

六一、斥候敵の重圍に陥り克く其任務を全うす
(大岩伍長、坂東上等兵、喜多上等兵) 四四

六二、瀕死の重傷を受け、敵彈下に從容任務の申し送りを了つて瞑目す
(藤本伍長) 四九

六三、血達磨となつて奮戦し、小隊の危急を救ふ(清水上等兵) 五二

六四、看護は要りません、早く任務を續行して下さい(小林上等兵) 五四

六五、孝子の奮戦(小川上等兵) 五六

六六、身を以て師團長の危急を救ふ(阿佐上等兵) 五九

六七、銃側を墓場とします(佐藤伍長) 六〇

六八、敢然挺首に立つて激勵し、重傷に屈せず指揮を續く(上田大尉)……………一六四
六九、通信手重傷を受けて人事不省に陥るも卷框を堅く握つて放さず

(佐野上等兵)……………一六七

附圖 上海派遣軍作戦經過要圖

第九師團の部

一 身に三弾を受け、鐵帽を脱いで起ち上り恭しく

陛下の萬歳を三唱す

歩兵第三十六聯隊第二中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 中 島 覺

福井縣吉田郡森田村上森田第一七號ノ七

中島上等兵（當時豫備役一等兵）は昭和七年二月二十二日上海會戰に際し唐家宅附近に於て敵の猛火を冒し前進中、不幸敵彈に股を貫通せられ其場に倒れた。志氣旺盛なる彼は之に屈せず尙も身を起しつゝ、「しつかりやれ」と戰友を勵まし、更に前進を續行せんとせし折も折、第二彈は腹部を貫通し再び挫と轉倒し、彼が更に起き上らんとするや、第三彈は彼の顔面を貫いた。今は是迄なりと思ひしか、彼は鐵帽を脱いで起ち上り「天皇陛下萬歳」を三唱し且「第二中隊萬歳」をも叫んで遂に名譽の戰死を遂げた。實に彼の悲壯なる戰死の刹那は彼の平素の修練と人格とを現はして居る。其攻撃精神の旺盛なる

實に皇軍の華であり粹である。

(遺族 妻 中島はる 住所 同本籍地)

二 今日の攻撃には必ず一番乗をするのだ

歩兵第三十六聯隊第十中隊

故陸軍歩兵伍長 勳七等 功七級 西村 武志

福井縣足羽郡和田村西方第三〇號二二

西村伍長(當時豫備役上等兵)は昭和七年二月二十五日上海會戰に於て普西の敵陣地を攻撃中、三發の敵彈を受け乍ら「俺の仇を討つて呉れ」と叫んで居た。是を聞いた戰友の心情は如何ばかりであつたらう。此日朝も伍長は「今日の攻撃には必ず一番乗をするのだ」と勇躍して居つた。彼は重傷を受け乍らも、尙分隊の一番乗を期し、自分の彈藥を近兵に渡し、「此彈丸で仇を討つて呉れ」と叫びつゝ遂に瞑目した。彼の旺盛なる攻撃精神

は實に軍人精神の精華である。

(遺族 妻 西村はる 住所 同本籍地)

三 進んで斥候を志願し運命を共にす

歩兵第三十六聯隊第九中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 野路 岩夫

福井縣福井市老松下町三六

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 新貝 捨雄

福井縣福井市日ノ出中町五一

昭和七年二月二十一日上海第一次攻撃に於て第三大隊は普西の敵を攻撃する爲、第十、第十一中隊を第一線として前進した。第九中隊は大隊の豫備隊として敵彈下を第一線に續行し、午後五時頃普西東方約二百米の地點に到達した。此頃天は曇り宵闇漸く迫

つて鬼氣に満ちて居た。普西村端よりは特に猛烈なる敵弾を受け之と對戰中、遂に夜となり第一線との連絡は杜絶えた。午後八時二十分頃伊部軍曹及深川軍曹の兩斥候が敵情搜索と第一線との連絡のため派遣せられた。

深川斥候長は「サア、これから斥候に行くんだ。誰か斥候に出よ」と部下に言つた。素より一命は投げ出して居る兵ではあるが、雨と降り来る彈丸の中のことであり、暫し沈黙が續いた。此時「軍曹殿、野路をば是非連れて行つて下さい」と野路上等兵(當時)の力強い聲が響いた。それと和するが如く「斥候ならどうしても新貝をやつて下さい」と新貝一等兵(當時)が申し出た。

それから斥候長は兵の選抜も終つて、勇躍敵村落に向つて敵弾を潛り乍ら出て行つた。此時雨さへ交つて來た。水濛又水濛、斥候は彈雨、地障を冒して隈なく村落を搜索した。敵も認めず、友軍もない。斥候長は此處にて其第一報告を中隊長に呈出した。此報告には傳令として野路、新貝兩勇士が命せられた。斥候長は途中の危険を慮り最初三名

の傳令を選んだが、野路、新貝異口同音に「イヤ二人で澤山です」と言うて兩名其任に服したのである。

兩名が未だ歸還の途につかない前のことである。或兵が「野路、其方向から前進すると危いぞ」と言つた時、「なわに今日は死を覺悟して居るんだ。心配するな。其方向を前進すると敵が見えないぢやないか」と答へて依然敵彈の最も激しい方向を自ら前進した。

新貝一等兵は孫家宅に於て戰友に向つて「さあこれから吾々の任務を完全に盡すべき時が來たのだ。しつかりやらう」と言つた。其戰友は「併し、彈丸の下を潛るのは初めてだが、中々凄いなだね」と話しかけると彼は「なわに俺は正義の爲、居留民保護のため花々しく戰死するつもりだ」と決心を示した。

中隊では深川斥候の歸りの頗る遅いのを案じつゝ、不安の裡に一夜を明かした。夜の明け方第一線から機關銃隊の看護兵が中隊の位置に來たので第一線の情況は略々判明し

た。午前六時頃中隊は普西の村落に入った。間もなく深川軍曹が歸つて來た。斥候長は中隊長に「昨夜十時頃野路、新貝の兩名を報告に歸らしめましたか」と問うた。中隊長は「いや來ぬ……………」。

午前十時頃村落内の諸作業も一段落ついたので、中隊長は山川軍曹以下の者をして野路、新貝兩名の搜索をなさしめた。又通譯には土民について質さしめた。併し兩名の消息に就ては何等の得る所もなかつた。捕虜？慘殺？中隊將兵の心は焦燥に驅られた。かくて其後も戦闘の餘暇毎にあらゆる情報を辿つて屢々搜索したが依然として不明である。

時は戰場勿々の間に經過して上海會戦も済み、三月十日頃から半永久的防禦工事に著手した。

三月二十日工事中に偶々揚家沿東側附近に日本兵の死體あるの報に接した。直に特務曹長が現場に到つて之を調査せるに正しく野路、新貝の死體である。

直徑約五米深さ約二米の我が砲彈孔内に於て敵十數名を刺殺し、身には二十數ヶ所の銃創を蒙り、野路上等兵の銃は鐵部のみ残つて他は裂損し、新貝一等兵は敵一人の胸を刺殺したる姿勢のまま、兩名殆ど相並んで壯烈なる戦死を遂げて居た。

次に新貝一等兵が二十一日に誌した日誌の全文を紹介する

二月二十一日

拂曉ヨリ銃砲聲激シ十九路軍ハ名ニシ負フ強敵ナリ戦死者ハ續々トシテ來ル我カ小隊長モ負傷ス今日ハモトヨリ覺悟ニテ死出ノ旅路近シ

友軍ノ飛行機來ルヲ見ル三十五聯隊夜襲ノ舉ニ出テ戦ヒ正ニ酣ナリ

午前六時半頃ナリウキスキ一杯ヲ向井三治ニ求ムイヨク總攻撃ニ移ラントス時正ニ二月二十一日午前九時ナリ

頭上ヲ掠メテ砲彈ノ泳クヲ見ル 死天命ナリ 運命ノ神ハ我ニ何ヲ與ヘントスルカ 恥カシカラサル死ヲ遂ケタキモノナリ

正義ノ爲ニ居留民保護ノ爲ニ戦ハンカナ時正ニ至レリ
二月二十一日午後一時十五分

(遺族 父 野路定七 住所 同本籍地)

(遺族 父 新貝喜久雄 住所 福井市日ノ出中町五一)

四 小隊長の旺盛なる攻撃精神突撃成功の因をなす

歩兵第三十六聯隊第五中隊

故陸軍歩兵中尉 從七位
勳六等
功五級 白井俊二郎

福井縣大野郡大野町大野七間第二二五號

昭和七年二月二十四日の夜、中隊長は登家宅の敵陣地に對し奇襲的に突撃陣地を構築すべき命令を下した。右第一線小隊の豫定突撃陣地の前方にはクリークがある。小隊長白井中尉(當時豫備役少尉)は、假令敵に過近なるも、翌日の突撃の爲にはクリークを越

えて陣地を構成するを可とすべきを意見具申し、中隊長を動かして自ら率先輕橋を架し小隊を全部前方に渡したものの、八十米前方の敵散兵壕の突角には掩蓋機關銃座があり、敵歩哨は其附近に潜伏し頗る危険であつた。其後數度の逆襲を受け彼我の手榴彈は闇を破つて炸裂し、小隊は非常な危険に陥つたが、既に背水の陣をとりたる小隊長の決意は愈々堅く、叱咤激勵、遂に約二時間後には各個の膝射散兵壕を構築することが出来た。小隊長は尙も工事線を横行して經始線を修正し、更に前方の地形を確めんと單身數米躍進中、約五十米前方の敵機關銃の爲に胸部を貫通せられ部下に擔がれ後方クリークを渡り、間もなく 天皇陛下萬歳の聲も微かに最期の息を引きとつた。

二月二十五日の我が砲兵の集中射撃に於て此突撃陣地は最近彈の被彈地内にあつたが、天裕にも何等の損害を見ずして中尉が身を以て構築した突撃陣地は最も有利なる據點となり、中隊突撃奏效の因をなしたのである。攻撃精神の旺盛なる、眞に國軍將校の龜鑑である。

五 進んで難局に當る

歩兵第三十六聯隊第一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 安立貞二

福井縣南條郡武生町鶴澤三〇

安立伍長（當時豫備役上等兵）は平素より活潑で元氣のよい兵であつた。昭和七年二月の動員下令に際し父久吉氏より「今度出征したなら立派な手柄を立て、必ず死んで歸れ」と強く勵まされ、本人も生來の氣性から「出征の上は生きて歸りません。必ず軍人の本分を全うします」との堅い決意の辭を殘し、勇躍召集に應じ出征したのであつた。

二月二十日以來の戦闘に於ては小行李、歩兵砲等の掩護に任じて居たが、彼は髀肉の

歎に堪へず、第一線に出ることを熱望して已まなかつた。二月二十四日の晩、丁度金家塙の敵陣地に突撃の前夜任了つて中隊に歸來し非常に喜んで中隊長に「安立は今歸つて來ました。明日の突撃には今までの埋め合せに大いに働きますからどうか最も危険なところに使つて下さい」と申し出た。

二十五日の午前、大隊が師團の重點方面として金家塙の敵陣地に向つて突撃を敢行した時、伍長は大隊命令に依り喜んで掃蕩隊に加はり、勇戦奮闘敵兵數名を仆して壕内の敗殘兵を掃蕩し、益々勇躍完全に其任務を達し、中隊に復歸せんとする時敵彈に斃れたのである。

進んで難局に當り、己の生命を鴻毛の輕さに比した勇猛なる安立伍長の行動は衆兵の仰いで以て範とすべきである。

（遺族 父 安立久吉 同本籍地）

六 鬼神の如き威の蔭に閃く人格

歩兵第三十六聯隊第十中隊

故陸軍歩兵中尉

從七位
勳六等
功五級

仲下 弘

福井縣今立郡服間村南中第六號ノ四八

愈々明二十五日は上海第二次攻撃の日である。僅かでも敵に近づく爲、交通壕を掘開して攻撃準備に取り掛つた。壕内に遮蔽し而も一人々々交代して作業を進めねば危険なる近迫作業であつたが、兵は勇敢にも壕外約十米に暴露して新しき壕の掘開を急いだ。其時小隊長仲下中尉(當時豫備役少尉)は肩に圓匙を負うて前方側方よりの激しき敵彈の中を匍匐し、「前へ前へ」と絶叫して居た。「小隊長殿彈丸が激しい!危い!」と叫んだ者があつたが「おい」と答へたまゝ前進を止めず、依然突撃陣地の推進に努めて居た。明くれば二十五日、愈々攻撃前進の命令が下つた。

小隊長が率先々頭に立ち、耀く軍刀を振り翳しつゝ、「進め〜」と部下を激勵した其様

に部下一同は鬼神を仰ぐが如く感じたのである。此勇敢なる突撃により敵陣地を完全に占領し、更に後方陣地に戦果を擴張中、不幸にして中尉は敵彈の爲頭部に貫通銃創を負ひ壯烈なる戦死を遂げた。

動員以來部下の中尉を敬慕すること深く、中尉亦よく部下を愛して居た。戦場に於ける彼の小隊の壯烈なる戦闘の裏面にはかくの如き中尉の人格が籠つて居たことを忘れてはならぬ。

(遺族 母 仲下のぶ 住所 同本籍地)

七 死して尙銃を離さず

歩兵第三十六聯隊第一中隊

故陸軍歩兵上等兵

勳八等
功七級

本 匠 清 信

福井縣坂井郡丸岡町丸岡八幡第一號

本匠上等兵(當時豫備役一等兵)は郷里に在るときも、現役時代も、眞面目で實直で「確りした若者」として稱へられ、而も非常なる親孝行者であつた。動員に方つては粉骨碎身己が本分を盡すべきを兩親に誓つて勇ましく應召し出征した。爾後上海警備間よく其任務を盡し、彼の誠實は上下の齊しく認むる所であつた。

二月二十五日の朝金家塙の敵陣地に對する大隊の突撃命令下り、所屬中隊は二組の掃蕩隊を出すことになつた。當時敵陣地には既に友軍の第一線が突入して居たが砲彈の炸裂、敵自動火器の射撃音は耳を聳するばかりにて轉た悽慘の狀を呈して居たのである。此時上等兵は「是非掃蕩隊に出して下さい、大いに働きますから」と自ら進んで申し出て、中隊長も其切なる願ひを容れた。彼は非常に喜び勇んで任に赴いた。

勇敢なる掃蕩隊は亂潰しに敵壕内の敗殘兵を掃蕩し、遂に大隊をして殘敵の妨害を受けることなく戰闘するを得しめたのである。併し此掃蕩戰の間に彼は敵彈の見舞ふ所となつて立派な最期を遂ぐるに至つた。彼は銃を確つかと握つたまゝ、鐵條網近くの敵壕

内で斃れて居たが、其顔には滿悅の笑さへ浮んで居た。

實に本匠上等兵は出征當時父に誓つた言葉を死を以て守つたのであつた。

(遺族 養父 本匠吉松 住所 同本籍地)

八 率先斥候に出てて危地に臨む

歩兵第三十六聯隊第一中隊

故陸軍歩兵少尉

正八位
勳六等
功七級

野 中 外 吉

福井縣吉田郡森田村八重卷第一一七號

野中少尉(當時特務曹長)は著實勤勉、よく部下より慕はれて居た。昭和七年二月二十五日午前十一時、上海附近の會戰第二次攻撃に際し、所屬大隊が金家塙附近の敵陣地に對し、敵の猛射する彈丸の中を敵陣地前二百米に於て突撃を準備中、大隊より第一中隊に河川偵察をなすべき命令があつた。野中少尉は率先敵の猛烈なる銃砲彈の中を物ともせ

す、クリークの偵察に任じ、敵前百米の地點に達した頃、附近に炸裂せる敵の砲彈破片の爲腹部盲管創を受けて畑地に倒れ而も尙ほひるますして前進せんとした。併し身體の自由を失ひ遂に起つ能はず。少尉は「天皇陛下萬歳」を唱へてゐたが臙て我が陣地内に收容せられ、翌二十六日野戰病院到着と共に瞑目したのである

(遺族 妻 野中ステラ 住所 福井縣今立郡神明村水落第八七號ノ四)

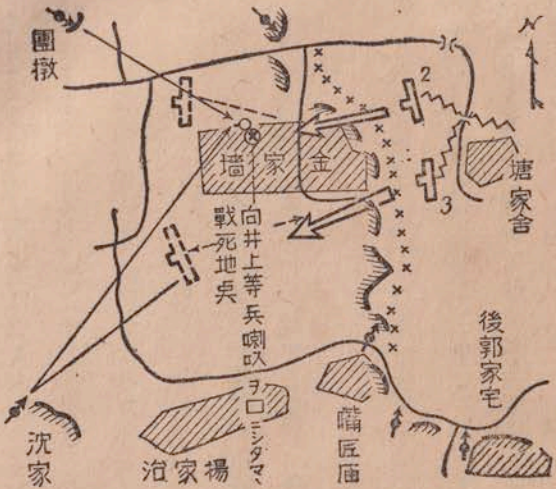
九 喇叭を口に當てた儘戦死す

歩兵第三十六聯隊第二中隊

故陸軍歩兵上等兵 功七級 向 井 政 義

福井縣坂井郡高椋村油爲頭第一〇號二八

向井上等兵(當時一等兵)は中隊の喇叭手であり、平素は快活無邪氣で而も諸動作には規矩があつた。嘗て炎天下に召集兵の檢閲が行はれた時、喝病患者の續出を來したが、



彼は己の疲勞と困憊とを顧みずよく兵の救護に力めて表彰せられたこともあつた。

昭和七年二月二十五日上海第一次攻撃に際し中隊指揮機關の一員として傳令の任に服し、午前九時五十五分頃愈々中隊が突撃に移らんとするや、突撃喇叭を吹奏し散兵に伍して勇躍敵陣内に突入した。之がため中隊の志氣は彌が上にも振つたのである。彼は更に追撃前進中疲勞の色をも見せず連続吹奏して居た。折しも不幸敵彈の爲胸部に貫通銃創を受け轉倒したが、彼は之に屈せず、特務曹長を大聲にて呼び「特務曹長殿、向井は尙ほ吹きます」と喇叭を口にしたら

儘遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。「渡るに易き安城の、名はいたづらのものなるか……」此軍歌の主は二人ある。一人は日清戦争の木口小平、他は上海會戦の向井政義である。

(遺族 母 向井さゝ 住所 同本籍地)

一〇 君國の爲生命を捧ぐるは無上の光榮

歩兵第三十六聯隊第五中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 笛 吹 護 一

福井縣南條郡南柚山村上別所第二號ノ二〇

笛吹上等兵(當時豫備役一等兵)は中隊配屬の機關銃手であつたが、身長衆に秀で、眼は大きくてすぎ透つてゐた。連日連夜の激戦に疲労困憊せる戦友達は上等兵の颯爽たる顔付を見たゞけで心強い感に打たれたと云ふ。何時見ても興奮の色もみせず、空腹らし

くもなく、疲労の有様は更に見えない。

凡そ上海の戦闘に於ては敵の側防機關を早く撲滅する事に依つて戦闘は解決せらるゝものと云つても過言ではなかつたらう。上等兵は其大きな眼を以て絶えず虎視眈々敵の側防機能を探索し、一度之を發見せば必ず猛烈なる連續射撃を以て之を制壓せずんば止まなかつた。惜いかな三月一日の登家宅の攻撃に於て田園方向の側防機關銃制壓中に反對側の側防機關銃より猛射を受け、上等兵の顔面は鮮血を以て染められ花々しき最期を遂げたのである。

遺言狀

拙者儀今般出征ニ就テハ死ヲ以テ國ニ報ユルノ決心ナリ、君ノタメ生命ヲ捧クルハ我カ無上ノ光榮ト思フ二十五箇年ノ間皆々様ニ御面倒ヲ掛ケマシタ愈々國ノ御役ニ立ツコトニナリマシタ

戦死ノ報ラセカ來タラ何卒嬉シテ下サイ男子ト生レテ實ニ僕ハ喜シテ死ヲ以テ國ニ報

ヒマス

金三十圓ハ千人針ヲ下サツタ橋本シダ様ニ上ケテ下サイ

御兩親様ニハ随分御達者ニ遊シテ下サイ(原文の儘)

此遺言を讀んだゞけでも上等兵の少しの暗さも無い男らしい立派な覺悟、如何にも颯爽たる彼の風貌が偲ばれるではないか。

(遺族 父 笛吹與次兵衛 住所 同本籍地)

一一 射撃號令を叫びつゝ戰死す

歩兵第三十六聯隊歩兵砲隊

故陸軍歩兵中尉

從七位
勳五等

三反崎

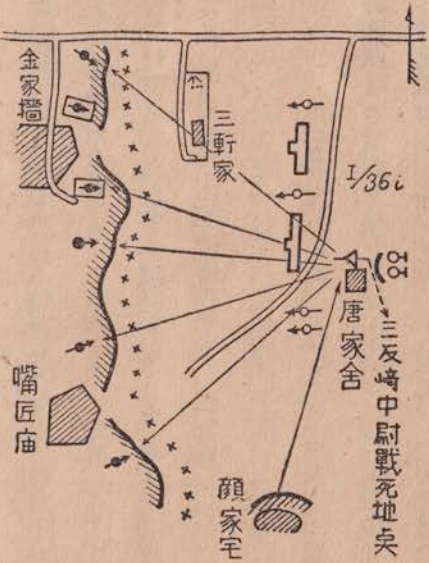
乾

福井縣足羽郡一乘谷村淨教寺

三反崎中尉(當時少尉)は平素より其高潔なる品性と卓拔なる識見とを以て部下の信頼

を一身に聚め、殊に重火器に就ての造詣深く、一般より矚目せられて居た。

少尉任官後一時第二中隊附であつたが動員と共に歩兵砲隊曲射小隊長となり出動した。動員並輸送間乃至上海警備間も克く職務に精勵して倦む所を知らず、眞に帝國將校の模範として上下の信頼愈々



厚さを加へて居たのである。

二月二十日遂に武力を以て十九路軍懲罰の命下るや、中尉は欣然として「正に男子の本懐、一死君國に報するのみ」と言つて居た。戦の前夜は身仕度、情報の精査等準備

萬端頗る微細に互つた。戦闘開始に方つては第一大隊に配屬せられ、率先垂範、勇敢に奮闘し、歩兵砲の威力を遺憾なく發揮した。歩兵砲隊は二十二日拂曉以來唐家舍附近に陣地を推進し、金家墻附近の敵の掩蓋機關銃の撲滅に努めた。此敵は前日來猛威を振ひ大隊の前進並攻撃作業を妨害すること甚しく一同痛憤措かなかつたが、一度曲射歩兵砲の射撃開始せらるゝや將兵一同溜飲を下げ得たのである。殊に其命中は極めて良好であつて、全弾命中により敵兵の倉惶として壕外に匍ひ出づる者、機關銃や露營用毛布の空中に跳ね上げらるゝもの等一再にして止まらず、其度毎に大隊の將兵は歡呼して志氣大に振つた。中尉は終始土饅頭を利用せし觀測所に於て射撃指揮に任じて居たが、此射撃の有効適切であつたのは一に中尉の指揮宜しきを得たに外ならぬ。彼亦滿悅を禁じ得なかつたであらう。正午頃大隊正面に在つて全掩蓋機關銃の撲滅乃至は制壓を完了し、戰場復敵の機關銃なき状態を呈した。中尉は直に射撃中止を命じ、自らは一時砲の位置に移らんとして觀測所より降りんとした刹那、一小銃彈は中尉の頭部を貫通した。彼が滿面鮮血

に染つた其様は凄絶悲壯であつた。直に應急手當が施されたけれども頗る重傷である。然るに剛毅なる彼は「なに大丈夫だ」と却て部下を激勵して自若たりし様は神々しき極みであつた。併し致命傷を受けた彼は暫時にして危篤に陥つた。此時中尉は突然起き上らんと努力しつゝ、力強い聲にて「射撃開始！」と叫び、次で「八百」「近し」「千」「よし」「命中」と、將に杜絶えんとする苦しき呼吸の中より此射撃號令が迸り出た。嗚呼彼は死の刹那、意識朦朧の裡にも尙且自己の職責を思つて止まず、射撃號令を叫びつゝ、護國の神となつたのである。

彼の悲壯にして麗はしき最期は實に將兵就中歩兵砲全隊の感激する所となり、爾後に於ける歩兵砲隊の戦闘振りは他の賞讃措かざる所となつた。勇武義烈なる中尉の英靈は永遠に皇國鎮護の神となり、歩兵砲隊の護りとなつて居るであらう。

(遺族 妻 三反崎キキエ 住所 福井縣福井市清川下町四五)

二二 獨斷百米を躍進して攻撃作業の據點を構成す

歩兵第三十六聯隊第十中隊

故陸軍歩兵上等兵勳八等
功七級 岩尾賢治

福井縣今立郡北新庄村北第四一號一五

岩尾上等兵(當時一等兵)は誠實な兵であつた。動員間は兵器委員の使役兵として兵器の整理に努力し、輸送に方つては第一小隊長傳令として著實に勤務し、上陸後師團司令部の直接警戒に任じ、二十一日の早朝まで克く其重任を完うした。

二月二十一日第一次攻撃に際し普西の敵陣地を攻撃中、午前十一時四十分中隊長は丁家宅西方畑地に於て鈴木上等兵以下三名を斥候として普西北側地區の敵情地形の偵察を命じ、岩尾上等兵亦此斥候に加はり、敵主陣地よりする猛烈なる銃砲火と、普西の敵陣地よりする熾盛なる機關銃火を冒し、最も沈著剛膽に行動して、敵主陣地の位置情態並普西北側には敵陣地なきこと、及普西西北側附近の水濠の景況等詳細偵察の上歸來報告

し、中隊長の突撃部署決定に大に貢献したのである。

普西西側に進出以來中隊は連日連夜攻撃陣地の推進に努めたが、此間大隊の左第一線たる中隊は、左大隊は左後方に在りて之との間に大なる間隙があつた爲、正面のみならず左側方よりする敵の側射を蒙り、剩へ地形平坦で陣地の推進容易ならず、爾後の戦闘の困難を豫想せられた。此様な状況の下に二十四日となつたが、此日午前十時半頃岩尾上等兵は戦友神谷上等兵に相次いで獨斷壕外に出で、敵彈雨の如き中を躍進し約百米前方に據點を構成した。此兩名の行動は中隊攻撃作業進捗の因となり、翌二十五日未明までに作業を完了して當日の攻撃奏功を容易ならしめたのである。

二十五日の攻撃に際しては、岩尾は右第一線第一分隊に屬し、中隊突撃部隊の先鋒となり、最も勇敢に率先敵陣地に突入して該地を奪取し、中隊突撃奏功の因を爲した。爾後敵彈雨注の下にあつて占領工事中、惜くも敵彈顔面を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。

連日連夜敵彈下に曝され攻撃作業遅々として進捗せず、動もすれば疲労困憊して固著

し易き時機に於て、敢然機を見て躍り出した此攻撃精神に充ちた獨斷、身を犠牲にしての獨斷は眞に軍人精神の精華であつて、戦友の志氣を振起し攻撃の進捗を促したことは實に大であつた。

(遺族 父 岩尾與三郎 住所 同本籍地)

一三 俺は昭和の木口小平になるのだ

歩兵第三十六聯隊第十中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 西 出 茂

福井縣坂井郡磯部村上安田第一〇號ノ二一

昭和七年二月二日動員下令の公報に兵營内は一時にざわめいた。西出上等兵(當時一等兵)は大聲で嬉しそうに「愈々行くぞ、今こそ我等の念願が叶つたのだ」と雀躍して各班を飛び廻つて居た。上海について待機中は何時も口癖の様に「早く第一線に出たいも

のだ」と言つて居た。

二月二十日、明日は愈々第一線に出て第一次攻撃に参加するのだと知ると、彼は突撃喇叭の譜を口吟みつゝ早速喇叭の手入に取りかゝり、戦友の顔を見渡し乍ら「おい、俺は昭和の木口小平になるのだ、皆しつかりと明日の俺の働を見て居て呉れ」と言つた。

明くれば愈々二十一日、東天の白む頃我が猛烈なる攻撃が開始せられた。敵の彈丸は雨霰と飛んで来る。昭和の木口小平を以て自ら任じた西出上等兵は「何糞！支那人の彈に中つてたまるものか」と豪語しつゝ前進又前進した。併し乍ら流石剛勇の彼も敵彈の見舞ふ所となつて、しつかりと喇叭を握りしめ、きつと敵方を睨みつけたまゝ、壯烈なる最期を遂げたのである。

(遺族 父 西出末松 住所 同本籍地)

一四 幽明の境にあつて只管中隊長及部下を念ふ

歩兵第三十六聯隊第七中隊

故陸軍歩兵軍曹 勳七等 功七級 中村清治

福井縣吉田郡西藤島村上伏第一二號ノ二〇

中村軍曹(當時伍長)は上海の戦場に於て、昭和七年二月十九日午後四時より二十九日午後に至る迄、野戦重砲兵の掩護小隊第一分隊長として各地に轉戦し、この間能く小隊長を輔佐し、常に積極的に行動し、率先部下に範を示し、以て重砲兵掩護の任務を全うした。三月一日登家宅より金家碼頭に向ひ攻撃前進中、頭部左側に數發の敵彈を受け人事不省となつた。入院後意識を恢復するや、先づ負傷せる中隊長の容態を尋ね、其輕傷なる旨を聞き、發言十分ならず又右半身不隨の如き苦惱の中にも、「中隊長殿萬歲、第七中隊萬歲」と唱へたと云ふ。

三月八日中隊長の見舞に際しても「中隊長萬歲」を唱へた。之を聞いた中隊長初め患者一同は中村軍曹が、自ら幽明の境を彷徨つゝも尙只管中隊長の恢復を祈つて已まず、又

部下に對する心づくしの數々の言を聞いて感激せざるものがなかつた。彼は三月十三日夜より容態急變して腦膜炎を發し、十五日午前八時上海派遣軍兵站病院にて遂に隊長と部下の健闘を念じつゝ、瞑目したのである。

(遺族 父 中村清太夫 住所 同本籍地)

一五 分隊は此處に全滅するとも銃を敵に渡すな

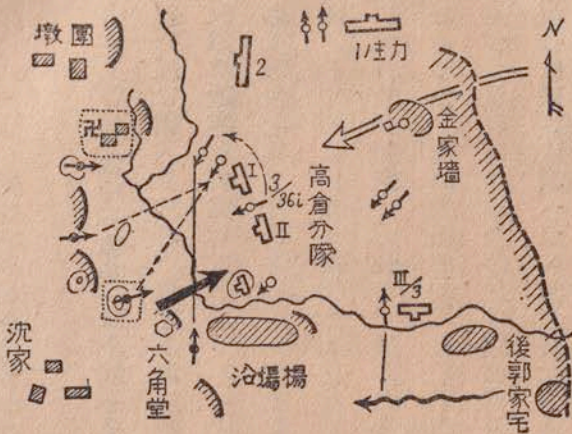
歩兵第三十六聯隊第三中隊

故陸軍歩兵曹長 勳七等 功六級 高倉武士

福井縣坂井郡丸岡町巽第一四號ノ一二

昭和七年二月二十五日午前六時、所屬中隊は昨夜來の不眠不休の努力で漸く金家塙の敵陣地前約百五十米に突撃陣地を完成し、砲兵集中射撃の危険を避くる爲一時攻撃陣地に後退した。將兵一同は逝きし戦友の報復をなすは今日にありとの悲壯な決意を面に現

はし、最後の朝食を攝つてゐた。第一小隊に屬する輕機關銃分隊長高倉曹長(當時軍曹)は、部下と共に昨夜の霜で冷えきつた握り飯をかじりつゝ、自ら牛鑊を取上げて叫んだ。「待つて居た時が來た。思ふ存分やらう。さあ最後の水盃だ」と悲壯な訣別をした。敵陣地は友軍野山砲、重砲の集中射撃で到る處爆煙に包まれてゐる。時々友軍の砲彈によつて、敵兵や輕機關銃の跳ね上るのが見える。午前十時頃愈々中隊の突撃發起となつた。高倉分隊は敵を猛射して其突撃を掩護し、更に適時適切に逐次前方に陣地變換をなし陣内攻撃を容易ならしめた。然るに敵は側射斜射を加ふるに手榴彈を投じて逆襲して來た。分隊長は「何を糞、敵を皆殺しにしてやるぞ」と叫んで之に猛射をあびせたが、惜しいかな敵彈を腹部に受けて腸の一部が露出するの重傷を負うた。此時分隊長を救はんとして身を起した射手亦敵彈の爲に殞れ、其他の彈藥手も殆ど負傷した。此時曹長は突然叫んだ「分隊は此處に全滅するとも銃を敵に渡すな。銃を敵軍に委ねるは皇國末代の恥辱だ」と、心は逸るが其身は遂に動かす。この時第一彈藥手片山上等兵、身に重傷を受



け乍ら突然跳上り、破壊せられた銃を片手に後方友軍の位置に移した。かくて其身は斃れたが皇國の名譽を守らんとした曹長の意志は達せられた。彼の英靈は間もなく敵陣地に高く翻つた日章旗を霜繁き草葉の蔭に望み見て瞑し得たことであらう。死の最後に至る迄、帝國軍人の名譽を守つた曹長の行動こそ後昆の鑑みである。

(遺族 母 高倉マキ 住所 同本籍地)

一六 俺の銃は何處だ、銃をかせ、早くく、銃は軍人の魂だ

歩兵第三十六聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵上等兵勳八等
功七級 山本 俊雄

福井縣今立郡神明村田所第二二號二一

山本上等兵(當時一等兵)は小銃手であつたが、輕機關銃手不足のため動員と共に輕機關銃分隊に編入せられ、爾來上海上陸後戰線に出るまで、常に自發的に輕機關銃の操作や故障排除等を研究して居た。

愈々昭和七年二月二十日第一次攻撃が開始せられ、其後各地の戰鬪に於て彼は第五彈藥手として常に勇猛果敢よく其任務を果して居た。最後の攻撃たる三月一日團墩の敵陣地向ふ攻撃前進に方つて、幾多亡き戰友の復仇の念に燃えた我が將士の意氣は眞に旺んであつた。此時背後で「やられたー残念だ！」と叫ぶ聲を耳にした戰友佐藤上等兵が振り返つて見れば山本上等兵は腹部貫通銃創に倒れて居た。「傷は浅い心配するな」と慰めたが彼は痛さに堪へつゝ、無念殘念と連呼した。暫くして「俺の銃は何處だ、銃をかせ、

早く〜、銃は軍人の魂だ」と戰友の銃を奪ひ取り起き上らんとしたが身體自由ならず、遂に諦めたものか「俺に構ふな、早く行け、後れては分隊の不名譽だ」と叫んだ。此時我が第一線は四、五十米前方の地點にて約一箇大隊の敵と苦戰中であつた。佐藤上等兵は彼を擔架兵に任せ——後に心は残れども、残してならぬ此身體——一目散に中隊の線まで躍進した。

死線に彷徨しつゝ、尙歩兵の魂を忘れず、重傷を顧みず分隊の名譽を思ふ。事なき時はよく之を口にする者があるが、生死巖頭に立つて而も之をよく爲し得るものは幾人あるであらうか。

(遺族 父 山本小三郎 住所 同本籍地)

一七 頭部に致命傷を受け乍ら敵情視察を止めず

歩兵第三十六聯隊第五中隊

故陸軍歩兵特務曹長 勳七等 功七級 土 肥 豊

福井縣坂井郡木部村木部東第二五號

土肥特務曹長(當時曹長)は中隊指揮機關に屬して居たが、二月二十九日京野小隊長負傷後は小隊長代理として奮闘した。彼は責任觀念厚く、言行共に忠君愛國の結晶であつた。

昭和七年三月一日登家宅附近の戦闘に於ては、戦闘前既に死を覺悟して居たものか、當日の日記を拂曉に記載し終つて居る。

彼は敵前百五十米に於て、雨霰のやうな機關銃弾を受け乍ら巧に竹林に遮蔽し、我に多大の損害を與へつゝあつた敵の側防機關銃の位置を發見せんものと、背を伸ばして視察中、敵弾は特務曹長の鐵帽を貫いて鮮血がタラ／＼と肩に流れた。彼はそれでも猶視察を止めなかつたが、力盡きて遂にバツタリと壕底に倒れたまゝ、悲壯なる最期を遂げたのである。

遺言 狀

總テ私ノ決心ハ動員下令時ニ申シ上ダタ通りデ今更言フ所モ思フ所モアリマセン此ノ上ハ只々君國ノ爲心念ヲ捧グ以テ萬民ノ期待ニ反セザルヲ期ス本日中隊長殿ヨリ遺言狀及爪髪ヲ出ス様申シ渡サレマシタ別封ノ通り送附致シマス命令ニ依ル事トテ女々シキ振舞ヒト御思召下サルマジク御願ヒ致シマス御兩親様ノ御健康ヲ祈リマス其他區民御一同様ノ歡送ヲ謝シマス

ますら夫のとり佩く大刀に國民の

期待を徹す今日ぞうれしき

(遺族 父 土肥豊吉 住所 同本籍地)

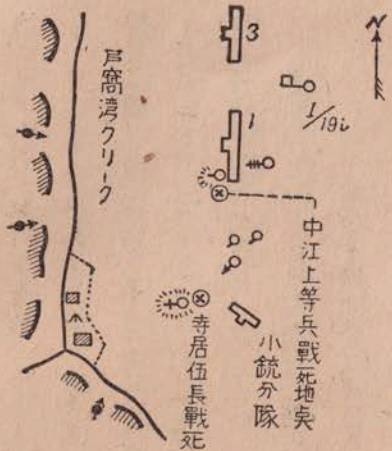
一八 分隊前へ!

歩兵第十九聯隊第一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳七等 寺居 達 弘

滋賀縣坂田郡長濱町三ツ屋一九三ノ二

昭和七年三月一日上海會戰第三次攻撃の日未明、第一中隊が芦窩灣西方敵陣地前百米以内に近接して突撃陣地の構成に著手するや、敵弾は雨か霞の如く、我が死傷者は續出した。此時中隊長は小銃、輕機關銃各一分隊をして左側方に進出して射撃すべきを命じた。此命を受けた輕機關銃分隊長寺居伍長（當時豫備役上等兵）が、率先勇躍前進して、目的の墓地に取りつくと、敵の一弾は彼の胸部を貫通したのである。伍長は其場に斃れたが生死の境、苦しき息の中にも「分隊前へ



！」と幾度か叫んで部下を勵まし、遂に「天皇陛下萬歳」を叫び乍ら壯烈なる戦死を遂げた。

伍長は身體輕捷、極めて勇敢であり、常に率先して前進し、克く部下を激勵して偉功を樹て、衆亦異口同音に彼が忠勇義烈を稱へざるものはなかつた。彼は死に至る迄任務を盡し、其最期の言葉は飽く迄部下を指揮する責任觀念の叫びと、陛下に對し奉る御別れの萬歳とであつて、共に彼の忠誠なる全生涯を死の瞬間に縮映したものであると云ふべきである。

(遺族 養父 寺居音吉 住所 同本籍地)

一九 新妻を離婚して決死の出征、戰場に於て骸となるも堅く銃把を握つて離さず

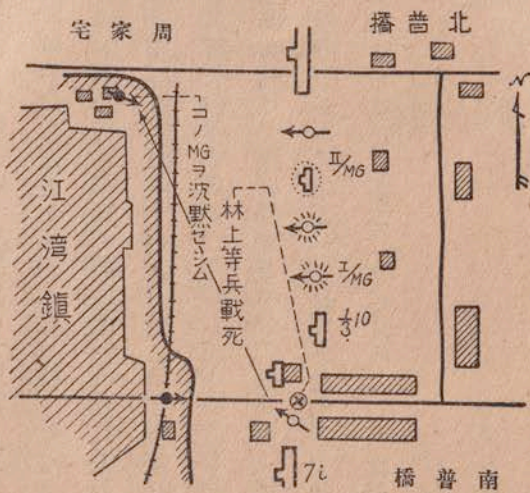
歩兵第十九聯隊第三機關銃中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 林 喜太郎

滋賀縣愛知郡豊國村大字豊満八八九

林上等兵(當時豫備役一等兵)は現役を卒へて除隊後家郷にあつて農業に従事して居たが、最近新妻を迎へたばかりであつた。二月二日突如充員召集令状を受領した彼は一死奉公を深く決意し、新婚日尙は浅き妻を離婚し、思ひを家郷に残すことなく決死征途に上つたのである。上等兵の父は日露戦争に従軍した歴戦の老兵であつて、倅の従軍を深く喜び、彼の首途に方つては聲を勵まして「決して生還を希ふな」と戒め、傍らに泣いて離別を惜む媳を叱責して上等兵を勇ましく出發せしめた。

昭和七年二月二十一日、第三大隊は江灣鎮掃蕩の任務を以て同日午後二時過、江灣競馬場東南側育英中學の集結位置より行動を起し、南北普橋部落(江灣鎮東側)にある便衣隊の掃蕩に従事したが、幾何もなく鐵道線路に據れる堅固なる敵陣地に衝突し、之を攻撃して其前方七、八十米に進出するの情況となつた。午後四時三十分頃大隊の最左翼た



る南普橋にあつて戦闘中であつた第二分隊は、中隊長直轄として小銃中隊の一部と共に敵の猛射を冒し、南普橋部落街路上を突進し、敵前六十米の地點に躍進した。爾後、前面踏切南側にある敵の掩蓋機關銃及斜方向周家宅東南端突角の藪の中にある敵の機關銃に對し射撃を加へ、遂に周家宅の敵機關銃を沈黙せしめた。當時分隊は敵の小銃及機關銃彈の集中を受けて即死二、重輕傷若干を出し漸次悲惨の狀を現出するに至つた。

分隊の射手であつた林上等兵は、敵火に暴露して、勇敢、沈著に行動し、敵に對し最

も有効なる射撃をして居たが、偶々前方掩蓋機關銃よりする敵彈の爲、前額部に盲管銃創を受け、午後五時十分壯烈なる戦死を遂げたのである。上等兵に代つて分隊長矢田軍曹自ら射手たらんとしたが、彼は骸となつてもしつかり銃把を握つて離さず、此様を見た傍の中隊長初め戦友一同は感激の涙に暮れると共に志氣愈々振ひ、斯くして困難なる攻撃を遂行し得たのである。實に皇軍機關銃手の模範であり、其散り際の立派なることは皇軍將士の華である。

上等兵戦死の報に接するや、彼の父は「戦死が餘りに早や過ぎるから、恐らく皇國に盡す所尠かりしならん」と慰問者に力なく挨拶して居たが補充隊長の書翰によつて始めて安堵せられたと謂ふ。實に此父にして此子あり、上等兵の壯烈なる戦死亦宜なる哉と云ふべきである。

(遺族 養父 林善三郎 住所 同本籍地)

二〇 其身重傷を受くるも猶己の任務たる負傷兵の後送を氣遣ふ

歩兵第十九聯隊第二大隊本部

故陸軍輜重兵一等兵 勳八等 功七級 若原 勇

岐阜縣揖斐郡大野村大字下方九六二ノ一

昭和七年二月二十九日午後、齊家宅に在て聯隊豫備隊であつた第六中隊は、第一大隊の攻撃に協力すべき任務を以て、其左翼に増援し周家宅及陸冢宅の敵を攻撃した。當時補助擔架兵に不足を生じ、醫校運搬に従事して居た若原一等兵(當時特務兵)は軍醫より擔架兵として患者の收容を命ぜられ、奮然として彈雨の中を猛進し、午後四時頃負傷兵を擔架に載せて運搬中敵彈を受けて倒れた。擔架に乗せられて居る負傷兵が「二人ともやられたか」と叫び、白井特務兵は「若原どうだ」と言ひ寄つたが、若原は少しも動ずる色なく「敵彈で倒れるのは本望だが、此患者を此儘にして置いては相濟まぬ」と言ひつゝ、事切れた。嗚呼彼は斯く任務の爲に邁進し、自己を顧みず從容死に就いたのである。

己を忘れて任務に斃るとは若原一等兵の如きを云ふのであらう。

(遺族 父 若原勘六 住所 同本籍地)

二 分隊團結の鞏固

歩兵第十九聯隊第一機關銃中隊

故陸軍歩兵軍曹 勳七等 功七級 田 中 利 夫

福井縣大飯郡加斗村東勢第四八號七ノ一

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 清 水 正 明

滋賀縣高島郡朽木村大字麻生一〇三五

田中軍曹(生前伍長)は豊橋教導學校を三番の優秀なる成績を以て卒業した下士官であつた。第一機關銃中隊第一分隊長として上海に出征したが、彼は中隊に於ける唯一の現役下士官で、戰場に於ける活動は實に目覺しいものがあつた、昭和七年三月一日、第一

大隊が芦窩灣附近に於て敵前約百米の地點に突撃陣地を構成するや、田中分隊は第一小隊長林少尉の指揮下に第三中隊に配屬せられ、挺進して第一線に進出し、敵前至近の距離に於て克く敵の側防火を火制し、中隊の突撃陣地構成を援助した。此間軍曹は雨の如き敵弾下に毅然として射撃指揮をなし、時には自ら射手となり、一方銃手を督勵して銃座を掘開せしむる等、常に非凡の活動を續けたが、偶々發射彈一千發に及ぶや、一時射撃を中止して手入をなし、再び清水伍長(當時豫備役上等兵)と共に敵を求めて射撃せんとした時、敵彈の爲顔面貫通銃創を受け遂に壯烈なる名譽の戦死を遂げた。分隊長戦死後清水伍長奮起して之に代り、よく戦闘を持續して居たが、伍長亦壯烈なる戦死をなすや、更に古川上等兵交代して戦闘を續行した。かゝる苦戦の中にも分隊の志氣は毫も衰ふることなく、能く最後迄戦闘を遂行し得たるは實に分隊長を核心とする分隊團結の鞏固なるによるものである。併し乍ら分隊長以下相次で斃るゝ如き苦戦續行の結果は、遂に右側の有力なる敵側防火器を撲滅し、歩兵中隊爾後の戦闘を容易ならしめたのである。

思へば尊き犠牲であつた。

(遺族 父 田中金藏 住所 同本郷地)
(遺族 甥 清水圭三 住所 同本郷地)

二三 教官と教へ子相擁して戰場に斃る

歩兵第十九聯隊第一中隊

故陸軍歩兵中尉

從七位
勳六等
功五級

山本 六郎

東京市中野區本町通六丁目一〇

故陸軍歩兵伍長

勳七等
功七級

大 鹽 春 吉

福井縣三方郡耳村佐野第一三號七ノ二

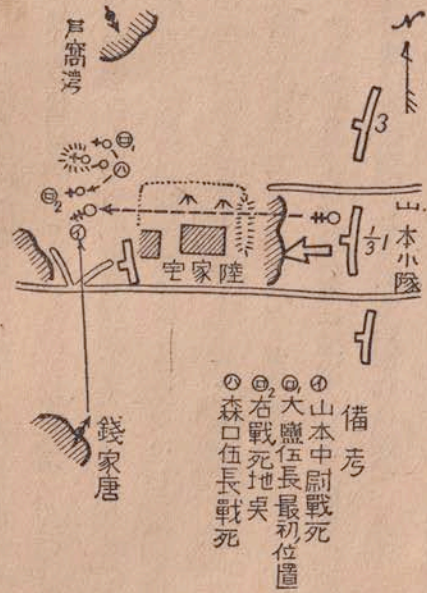
故陸軍歩兵伍長

勳八等
功七級

森 口 清 六

滋賀縣伊香郡古保利村東柳野九〇七

昭和七年二月二十九日拂曉、第一中隊は陸家宅攻撃の爲、方濱を發し敵の猛射を受けつゝ勇躍して前進すること約七百米、敵前百二、三十米に達するや、右第一線小隊長たる山本中尉(當時少尉)は敵彈雨注の中に泰然直立し、後方を振り向いて、「中隊長殿！」と呼んだ。中隊長は銃砲聲のため中尉の言を聞きとれなかつたので、小隊長の許に馳せつけ「何か？」と問うた。小隊長は「前面に敵なきが如し」と答へた。中隊長は更に、「第三中隊は芦窩灣に進出したか？」と問うた所、「進出した様である」と答へたので「然らば貴官の小隊は陸家宅に突撃すべし。予も豫備隊と共に續いて突入す」と命じた。小隊長山本中尉は時流れりと許り「突撃に！進め！！」の號令を叫ぶと共に、自ら軍刀を振り翳し先頭に立つて突進し、部下亦小隊長に遅れじと敵陣地に突入した。かくて陸家宅の敵陣地を突破し、其西端に進出するや、陸家宅西方周家宅部落より敵の猛射を受けた。其距離は百米弱であり而も前面には幅七、八米に及ぶ水濠があつて前進を遮ぎられ、爾後の突撃を許さなかつた。小隊は已むなく其場に伏臥して射撃を開始した。小隊長は



叫んだ。併し乍ら中尉は瀕死の重傷である。極度の渴を覚えて居るらしい。近くにあつた輕機關銃分隊長大鹽伍長(當時上等兵)は水筒を持つて駆けつけ、小隊長を抱き起し水を飲ませた。其時又も敵弾は伍長の頭部を貫いた。斯くて教官と教へ子とは今や指揮

「支那兵の彈丸なぞ中るものか。伏射では駄目だ！膝射でやれ」と部下を激勵して居たが、此時不幸にして敵弾は左前方より中尉の頭部を貫通し、鬼神の如き勇將も即座に轉倒した。彼は苦惱を忍んで更に「俺はやられたが此地は敵に一步も譲ることはならぬ。假令敵が一箇聯隊來ても斷じて退くな」と

官たり部下たる姿に於て、相擁して壯烈なる名譽の戦死を遂げたのである。

此時大鹽分隊の射手森口伍長(當時上等兵)は獨斷奮戦敵に猛射を浴びせて居たが、又も敵弾に頭部を貫通せられ、輕機關銃の床尾をシツカと肩につけた儘、前に俯つ伏して壯烈なる戦死を遂げた。森口伍長も亦山本中尉が初年兵から慈育せる勇士である。此教官にして此教へ子あり。上海の戦場を飾る三勇士は永切に手を携へて護國の神となつて居るであらう。

- (遺族) 兄 山本俊雄 千葉縣千葉郡津田沼町久々田一五三五)
- (遺族) 養父 大鹽爲藏 福井縣三方郡耳村佐野第一二號一一)
- (遺族) 父 森口安次郎 住所 同本籍地)

二三 勝つたか否か

歩兵第十九聯隊第十中隊
故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 羽瀬 大雄

福井縣敦賀郡松原村松島第一一三號三七

昭和七年三月一日午後四時過、審植公司より夏馬灣の敵陣地に對し攻撃中、羽瀬上等兵(當時豫備役一等兵)は不幸鐵帽を通した敵の小銃彈に頭蓋骨の一部を碎かれ、全身紅に染まつて打倒れた。彼は彈丸雨飛の中に在つて假綑帶を受けつゝ、刻々に意識は不明となり「萬歲」の聲も細く、遂には思ひ出したやうに時々口の中で「萬歲々々」と呟くが如く見えた。其後、後送せられ兵站病院にて軍醫の手當を受くることゝなつたが、如何せん頭蓋骨の一部を剝奪せられ、腦髓の幾分か失はれて居ることゝ、到底生命をとり止むるの望みはなく、斯くして痛はしくも彼は全然意識不明のまゝに不思議にも五日、一週間と日を重ぬるに至つた。幹部、戰友が見舞うた時彼は紙と筆とを出した。其意判然としなかつたが、纏て「勝つたか否か」と記し、「大勝利なり」と答ふれば顔に微かな笑を浮べ、不自由なる上半身を起し乍ら「萬歲!」と兩手を舉げて微かに叫び安心したかの如く再びうつら／＼と眠りに墮ちて行つた。斯くする内に腦膜炎を併發し、時々痙攣を

起し苦み悶え始めたので、逆も覺束なしと見た軍醫は懇に「何か言ひ遺すことなきや」と問うたが、彼は微か乍らに「死は郷關を出るときに既に覺悟して居り、此期に及んで何等言ひ遺すことなし」として何事も一切語らず、遂に三月十六日午後十一時四十五分絶命した。このやうに全く意識を失ひ乍らも、一意報國の念を忘れざる赤誠は軍人精神の精華であつて、實に軍隊志氣の表徴である。其崇高なる人格は今や神格と化し、死の間際に見た如き精神を以て永く皇國を守護することであらう。

(遺族 兄 羽瀬岩吉 住所 大阪市東淀川區本庄西通二ノ三二)

二四 中隊長の安否を思ふ傳令の最期

歩兵第十九聯隊第三機關銃中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等
功七級 田部 徳三郎

滋賀縣犬上郡彦根町大字本二七

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 北 川 信 藏
滋賀縣犬上郡東甲良村大字横關五八六

田部伍長(當時豫備役上等兵)は數年前、機關銃隊を最優秀の成績を以て除隊し郷里に歸つたが、在郷間の成績も亦模範的で、眞に良兵良民の典型であつた。

昭和七年二月二日夜彼は充員召集令狀を手にした時雀躍して喜び眞に勇躍して應召した。伍長は入隊後小銃中隊たる第十一中隊に編入せられて出征することになつた。日頃鍛へた機關銃の技倆に對し、内心失望落膽を禁じ得なかつたことであらう。然るに上海上陸後二月十五日一部兵員の編入替へが行はれ、田部伍長も再び懐しき機關銃中隊に加へられた。彼の喜びは當時中隊長に語つた次の言葉によつても窺はれるのである。

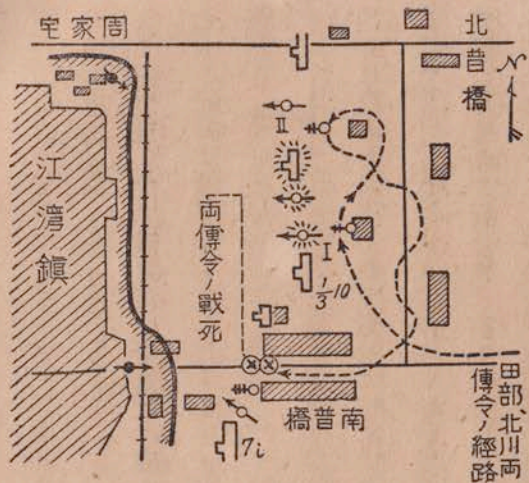
「平時機關銃隊で育つた者が、再び機關銃を持つて戦ふことの出來ますのは私の本懐之に過ぐるものはありません。私は應召前郷里にて故花澤少佐殿の葬儀に列しました。が、あの様な盛大なる町葬を営まれるものとしますれば、私も亦死んでも少しの遺憾も

ありません。どうか私を最も困難なる所に使つて下さい」と。

北川上等兵(當時一等兵)は平素から寡黙謹嚴、實直温順なる兵であつた。出征前には中隊長の傳令を務めて居たが、家庭には母一人が貧しく、淋しく残つて居た。中隊長が彼を補充隊要員に残さんとしたのも深き思案の結果であつたらう。然るに彼は「日本に生を享け、皇恩に酬い奉るは今日であります。如何なることがあつても從軍さして下さい」と歎願して已まず。中隊長も其赤心に動かされて遂に野戦隊に編入したのであるが、彼の喜びは譬ふるに物なく眞に欣喜雀躍して居た。出發の當日の如きは中隊長の自宅前に至つて萬歳を高唱したと云ふ。

昭和七年二月二十一日、第三大隊は江灣鎮掃蕩の任務を以て、午後二時過江灣競馬場東南側育成中學の集結位置より行動を開始し、南北普橋部落(江灣鎮東側)の便衣隊の掃蕩に従事したが、幾何もなく鐵道線路に據れる堅固なる敵陣地に衝突し之を攻撃中其前方七、八十米の線に進出した。此時機關銃中隊は第一、第二兩小隊を第一線中隊の伍間に

入れて戦闘中であつたが、機關銃中隊長は兩小隊長に攻撃に關する中隊命令及意圖を傳令をして傳達せしめ、自ら手裡にある一分隊を指揮して小銃中隊の一部と共に南普橋部落内街路上を敵前六十米の位置に躍進した。田部、北川兩名は中隊指揮機關として常に小銃を携帶して中隊長の側にあつたが、前記兩小隊長への中隊命令傳達の重任を帶び、熾烈なる敵彈下を暴露して横方向に移動し完全に其任務を果し、再び中隊長の下に復歸せんとした。當時部落内に居た便衣隊の活動益々活潑となり、加ふるに時々敵の迫撃砲彈落下し頗る危険であつたから、第一小隊長は兩名に伏臥せしめ、敵火の衰ふるを待つべく命じた。兩傳令は一時傍の溝に入つて敵彈を避けたが、中隊長の身邊を氣遣ひ、最早躊躇すべき時でないと思つたのであらう「中隊長の安否を確めねばなりません」と小隊長に告げて再び行動を起し、南普橋街路上を敵彈を冒し躍進したが、鐵道線路南側の敵掩蓋機關銃のため縦射せられ、各々身に數彈を受けて、敵前七十米の阻絶壕の位置に兩傳令相次で壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。時に午後四時四十分である。



此時中隊長は第一線にあつて部下を督勵中、「便衣隊が居るぞ！兩側の家屋に氣をつけよ」と云ふ裂帛の如き叫び聲を耳にして思はず振り返つた時、田部、北川の兩傳令が相擁して街路上に仆れるのを見たのであつた。

田部伍長の郷里に於ては嘗て伍長自ら加はつた花澤少佐の町葬の如く、又彼の望みの如く盛大なる町葬が行はれた。彼は嘗て中隊長に語つた通り、今や江南の地下に會心の笑を漏して永久の眠りについて居ることであらう。又北川上等兵も「私の戦死によつて皇恩の萬分の一だけは御盡しすること

が出来ました。お母さん喜んで下さい」と江南の地下で微笑して居ることであらう。

(遺族 父 田部徳太郎 住所 同本籍地)

(遺族 母 北川ひと 住所 同本籍地)

二五 之て満足だ、少しは名譽を恢復し得たであらう

歩兵第十九聯隊歩兵砲隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 田 中 健 吉

福井縣大飯郡高濱町宮崎第四三號四〇

徒らに議論のみ多くして實行の伴はぬのが今日青年の通弊である。然るに田中上等兵(當時豫備役一等兵)は文字通りの不言實行であつて、平戦兩時を問はず常に進んで上官の意圖に副ふ如く努めた。其心裡には少しも飾り氣や諛ひ氣はなく純真其物であつた。彼が斯うする中にも一つの悩みがあつたのである。「現役當時の不名譽を恢復せねばな

らぬ」と云ふことであつた。彼は嘗て現役中フトした不注意から處罰を受けたことがあつたが、其後如何にしたら此不名譽を取り返し得るであらうかと心中私かに惱んで居たのであつた。これがため彼の不言實行、積極的に率先して任務に努力するの決心は平素の性格に加へて更に一層の堅確さを増したのである。

昭和七年二月二十一日江灣鎮の敵を掃蕩するに際して、小隊長の命に應じ、言下に彈丸雨注する中を飛び出して、負傷した中山軍曹を急造擔架によつて救つたのも上等兵であつた。當日の戦闘に於て、暗夜而も無暗に飛び来る敵彈を冒し、連絡斷絶の大隊本部と歩兵砲小隊との手を握らしめたのも彼であつた。當時大隊本部と連絡斷絶を心配して居た小隊長が「誰か大隊本部に連絡に行け」といふや、彼は言下に「行つて來ます」と出て行つた。

二月二十八日午後五時頃勞働大學附近の敵を攻撃する爲、曲射歩兵砲小隊長が齊家宅附近に於ける陣地を偵察した際、傳令として隨行したのも彼である。小隊長は樹木密生

して遮蔽角多く、之がため上等兵に樹木の伐採を命じたが、彼は只例の如く黙々として一意所命の任務を續行し、更に命せられなかつた樹迄萬全を期するために伐り拓いた。樹木は徑一尺五寸もある。小隊長は彼の勞苦を察して交代せしめんとしたが、「一人でやれます」と言つて依然鋸を動かして居た。

翌二十九日大隊は早朝より攻撃前進に移り、歩兵砲小隊は觀測所を齊家宅西端家屋上に設け、遞傳に依つて射撃を指揮して居た。彼は此重要なる傳令勤務にも服して居た。

大隊は芦窩灣附近の敵機關銃のため側射せられ前進は至極困難であつた。曲射歩兵砲小隊は之を制壓して居たが、此時右方よりの側射弾のため上等兵は左腹部に貫通銃創を受け、「残念だ！」と叫んで斃れた。直に急造擔架によつて後送せられたが、架上「天皇陛下萬歲」を三唱した。小隊長は腕を上にしたまゝ、運ばれて行く彼を見て、小隊長は「輕傷であるな」と安心した程從容自若として居たのである。彼が野戰病院に運ばれた時

は既に死期迫り、彼も之を知つてか、「之で満足だ。少しは名譽を恢復し得たであらう」と述べ、莞爾として如何にも安心したかの如く瞑目した。

生前の處罰の如きは彼の壯烈なる忠誠によつて立派に拭はれて居るのみならず、其不言實行によつて戰友に教訓を垂れ、後昆に範を示し、戰鬪の成果に貢獻したことは偉大なる勳功である。江南の花と散つた彼の英靈亦永へに安らかに眠るであらう。

(遺族 父 田中喜之助 住所 同本籍地)

二六 天皇陛下萬歲！ 山口、塚田、山……………口……………

歩兵第十九聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 小 杉 文 二

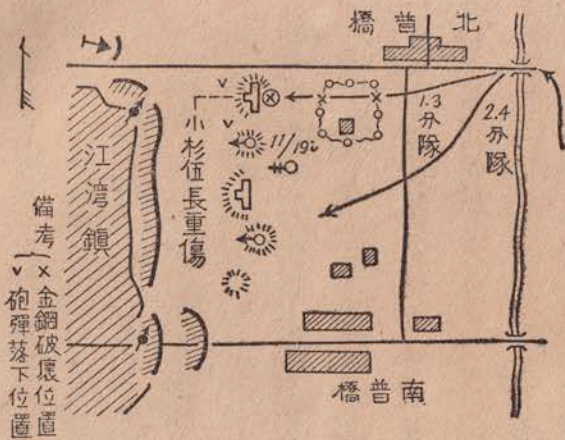
滋賀縣犬上郡彦根町大字一番一〇

小杉伍長(當時上等兵)は性闊達、頭腦明晰にして特に犠牲的精神に富み、友情に厚く、

上下の信望極めて厚かつた。

昭和六年七月初旬の事である。成績抜群なる當時の初年兵小杉は同年兵七十一名中の第一位として一等兵に進級した。彼は或日將校室に教官を訪れて「私よりも優秀なる者は澤山居ります。私は少し面目が良過ぎます」というた。世の中には他人を掻き退けても己の立身を企てる者が多いのに、是は又何たる麗はしい心情であらうか。

昭和七年二月二十一日江灣鎮附近の激戦に於て、小杉伍長の屬する小隊は敵前百數十米に達したが、附近一帯は養鶏場の金網が恰も鐵條網の如くに我が軍の行動を阻止して居たので、爾後の前進は全く不能に陥つた。敵は此機逸すべからずと我が軍に猛射を浴びせ、硝煙彈雨、土煙低迷して壯絶を極めた。此時猿の如く躍り出て、金網に向つて突進した勇士がある。彼小杉伍長其人であつた。伍長は神速機敏に金網を破つて進路を開いた。而も雨の如き敵彈の中で微傷でも負はなかつたのである。



小隊の進路は小杉伍長の犠牲的奮闘によつて開かれた。彼は小隊の先頭に立つて敵前百米の地に近接し射撃を開始した。此時敵の一砲彈は轟然として伍長の近邊に炸裂し、彼の全身は忽ち爆煙に掩はれた。爆煙の消えたあとに、彼は側頸部破片貫通創を受け瀕死の重傷を負うて横はつて居た。直に戦友の手によつて野戦病院に後送せられたのである。

翌二十二日氣息奄々として野戦病院の寢臺上にあつた彼は十數時間に互る幽明の境より醒めて四圍を凝視した。昨日の戦闘に於て彼の所屬第十一中隊は戦死三負傷十五名を出し、其負傷

者の大部は伍長と同室に收容せられて居た。彼が四圍を凝視したのば己の戦友山口、杉本、堀川各上等兵や塚田、茶木各一等兵等を発見したからである。

小杉伍長は突然聲を出した。實に奇蹟である。「杉本ごうだ。山口大丈夫か。塚田……」此時彼の臨終は既に迫つて居た。同室の負傷戦友は思はず伍長の身邊に集つた。彼は幽かに口を開いて「天皇陛下萬歳！ 山口、山口、塚田、山口、山……口……山……」此くして遂に最後の息を引きとつた。

彼が一言私事に及ばず、聖壽の萬歳を壽ぎ奉り、只管戦友の快復と奮闘とを祈りつゝ、逝いた其最期は古武士の夫れに似て天晴ではないか。實に彼の立派なる最期は二十數年に互る全生涯の縮圖であり、生前に於ける彼の言行と死の瞬時に於ける言動とは全く一致して居たのである。

(遺族 養父 小杉庄太郎 住所 北海道函館市谷地頭町二二)

二七 死に瀕して戦友の安否を氣遣ふ

歩兵第十九聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 高橋祥太郎

滋賀縣愛知郡秦川村大字常安寺三二九

昭和七年二月二十一日北普橋の戦鬪に於て高橋伍長(當時伍長勤務上等兵)は敵彈の爲左胸部に瀕死の重傷を受けて倒れた。分隊長は松宮上等兵、中井一等兵に之が收容を命じ、彈雨を冒して現地に急行せしめ、己も亦時機を得て之に續いた。此時高橋伍長は水濠の斜面に伏して堪へ難き胸部の激痛に呻吟して居たが、松宮等が收容の爲來た旨を告ぐるや、彼は蒼白の面に喜悅の色を浮べ、莞爾として手を堅く握り「君等が今尙健在なのは嬉しい」と微かに言うた。嗚呼身は今や生死の境に在りながら尙且戦友を念ふ、其友情の厚さに兩名は熱淚滂沱たるを禁じ得なかつた。伍長の負傷部を詳細に檢するに、彈丸は左背部外套に微かに彈頭の油を残して胸部を貫通し、一刻も猶豫し難く、兩名は

伍長を直に擔架に移さんとした。折しも數歩を隔たず落下炸裂した敵砲彈二發、あつと思ふ瞬間兩名は土煙と共に跳ね飛ばされた。此時高橋伍長は猛然と半身を起し「松宮！中井！どうした！」と呼びつゝ、兩眼をかつと見開き、兩名が天祐にも無事であつたのを見て安心したか、再び力なく面を伏せた。

今しがた友情の厚さに涙せる戦友は更に又此美はしき心情に接し、高橋伍長の盡きせぬ厚き情にいたく心を動かされつゝ、收容したが、間もなく幽明所を異にするに至つたのは惜むべきである。

(遺族 父 高橋榮治郎 住所 同本籍地)

二八 父に會ひたくば靖國神社に來れ

歩兵第三十五聯隊第一大隊(大隊長代理)

故陸軍歩兵少佐 正六位 勳四等 功四級 酒井 豊志

福井縣吉田郡東藤島村林第四八號一二ノ三

昭和七年二月二十九日、上海第三次攻撃の前日に第一大隊長大澤中佐は前郭家宅(江津北約五百米)に於て第九師團左翼隊右第一線大隊長として突撃陣地を構成中壯烈なる戦死を遂げた。大隊長を失つた大隊は指揮の中樞を缺き、剩へ中、小隊長の殆ど大部を失ひ戦鬪力の減耗著しく、非常な苦境に立つた。聯隊長は當時第九中隊長であつた酒井少佐(當時大尉)に命じ第一大隊長代理たらしめた。少佐は二十九日午後其職に就き、銳意攻撃の諸準備に力め、翌三月一日午前十時稍前、我が砲兵の攻撃準備射撃間、滿を持して突撃時刻(午前十時左翼隊全正面一齊に突撃を行ふ計畫であつた)の到るを待ちつゝ、あつた時、職責感に燃ゆる少佐は塹壕内に立つて具さに敵情及隣接部隊の状況を視察中、横罕宅附近の敵陣地より狙撃を受け、不幸敵彈右頸部より貫通して左肩に達し壯烈なる戦死を遂げた。

大澤中佐、酒井少佐は僅に數十米を間し相前後して同じ職に殉じたが、此兩氏が陸軍

士官學校の同期生で、平素より親交の間柄であつたのも奇しき因縁である。

酒井少佐は寡言實行の人であつて平素黙々として居たが、部下に對する情愛は宛ら慈父の幼兒に於けるが如く、部下信望の的であつた。宜なる哉其家庭に於ける兒女教養の躰は、眞に至れり盡せりであつて、二月十九日即ち上海會戰の前日、上海大康紗廠の宿舍に在つて戰鬪準備に多忙を極めて居た中から、長男清志、長女信子兩名に對して別記の如き温情溢るゝ遺言を贈つたが、少佐が全く生還を期せずして一死君恩に報ずるの念牢固たりしを思はしめ、讀む者皆「父ニ會ヒタクハ靖國神社ニ來レ」なる一節に至つては涙を流さざるはないであらう。

少佐の屬する歩兵第三十五聯隊は二月二十日より第一線となつて、江灣鎮北方地區より願家宅から後郭家宅に互る敵を攻撃し、二十二日第一次攻撃には敵陣堅くして遂に豫期の戰果を收め得ず、加之死傷相繼ぎ、同僚中隊長高田大尉、河合大尉を始め幾多勇士の殞るゝを見て少佐も亦躬ら大に決する所があつた。

二十五日第二次攻撃の前日、名刺(別記)に各上官への訣別を書いて所屬大隊長板津少佐に托し、獨り莞爾として微笑んで居つた。少佐の心事は所謂必勝にあらずんば必死にあり。後昆に貽せし數々の教訓は實に貴重なるものである。

遺書

酒井清志殿

酒井豐志

清志ニ告ク

父ハ異國ニ在リテ敵ト戦ヒ再ヒ生還ヲ期セス、清志未タ小兒ナリト雖モ既ニ七歳ニ達シ本年四月ヨリハ小學校ニ入學ス
 平素父ノ言ヒ聞セシ事ハヨモ忘レサルヘシ、特ニ昭和七年二月七日出征ニ當リ篤ト言ヒシコトハ終生忘ルル勿レ、再言ス
 常ニ母ノ命ヲ守リ勉強シテ偉イ者ニナレヨ、清志ハ身體健康ナルモ齒ノミハ弱シ、將來齒ニ注意セヨ

清志ハ天性聰明ニシテ特ニ記憶力ニ富ムモ、稍々神經質ニシテ感情ニ激シ易シ修養シテ有爲ノ人物トナレ

弱キ女ノ身一人ニテ清志、信子等ヲ養育シ一家ヲ立ツル母ノ苦心ハ絶大ナリ

清志ヨ、心身共ニ健全ニ成長シ妹ヲ愛シ一家ノ柱石トナリ母ヲ安ンセヨ

清志ヨ、父ヲ記憶シアリヤ、清志ノ祖父モ汝ヲ愛セシコト絶大ナリシソ

清志ハ如何ニシテ之ニ報イントスルヤ

生死ヲ賭シ決戦ニ向フニ望ミ父ニ言ス

『常ニ母ノ命ヲ守リ勉強シテ偉イ者ニナレヨ』

之レ父ノ清志ニ與フル最後ノ言ニシテ且ツ無二ノ念願ナリ

父ニ會ヒタクハ靖國神社ニ來レ

父ノ靈常ニ清志ヲ守ラン

酒井信子殿

信子ニ告ク

酒井豊志

父ハ異郷ニ在リテ敵ト戦ヒ、又信子ヲ見サルヘシ、信子ハ未タ二歳ニシテ東西モ分
タサル幼児ナリシカ可愛ラシキ者ナリキ將來モ

女ハ心ヤサシク、容姿端麗ニシテ人ヨリ愛セラレルヲ望ム

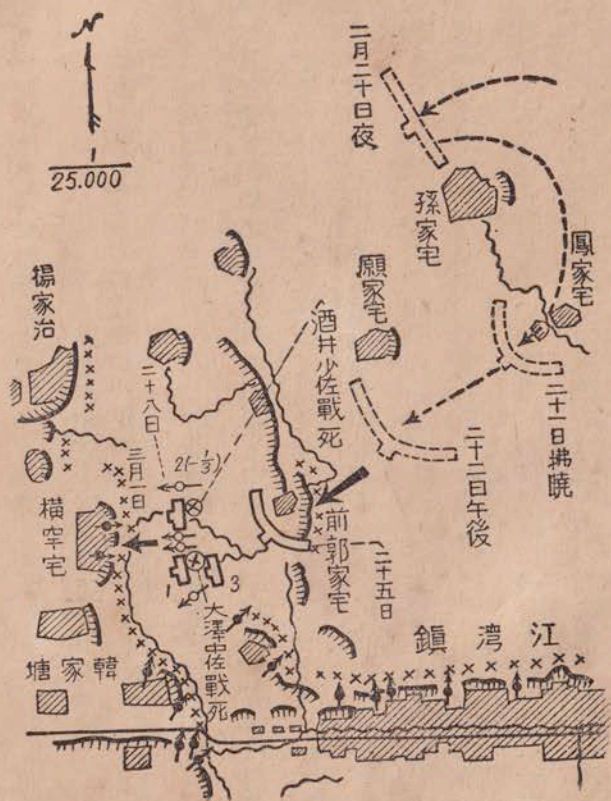
ヨク母ノ命ヲ守リ、兄ヲ敬ヒ、兄妹一致シテ母ヲ大切ニセヨ

學校ニ入ラハヨク勉強シ又一ノ職ヲ覺ユルヲ可トス

結婚セハヨク夫ニ仕へ後顧ノ患ナカラシメヨ、我儘ハ身ヲ亡ス基ナリ

父縦令戰場ノ露ト消ユルトモ靈ハ常ニ信子ノ成人ヲ樂マン

大澤大隊攻撃經過要圖



名刺

永クオ世話ニナリマシタ御禮申シ上ケマス
 歩兵第三十五聯隊
 陸軍歩兵大尉 酒井豊志
 板津大隊長殿
 徳野聯隊長殿
 前原旅團長閣下

(遺族 妻 酒井玉喜 住所 石川縣石川郡野々市町ヲ二六一)

上記は名刺に昭和七年二月二十四日後郭家宅攻撃陣地壕内に於て鉛筆書せるもの

二九 死を以て突撃路を完成す

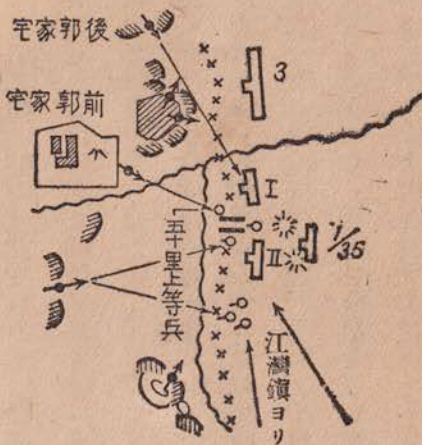
歩兵第三十五聯隊第一中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功六級 五十里 留次郎

富山縣婦負郡古澤村七三八四

昭和七年二月二十日梁般宅附近、目を遮るものもない平原の真直中に何者か、前方に横はつて居る。これとは思つて近寄つて見たらそれは野晒しの棺桶であつた。當時森越軍曹の分隊は中隊の前へ出て警戒してゐた。中隊と分隊との間にはクリークがある。それに渡河設備をせよと云ふのが中隊長の命令であつた。現役のときから角力で名を賣り名實共に聯隊一の力持ちであつた五十里上等兵(當時豫備役一等兵)は二百米程離れた人家へ走つて行つて大きな角材を擔いで來た。彼は足柄山の金太郎の様な恰好で其クリークへ橋をかけた。中隊と機關銃隊と歩兵砲とは此一本の橋に依て前岸に移り得たのである。

五十里上等兵戦死地を敵陣地前五十米



越えて二十二日、後郭家宅の敵陣地に對する突撃の前、小隊長が小隊正面の鐵條網を破壊しようと思つたとき、自ら志願して出て來たのが彼であつた。永井上等兵と開發一等兵と彼の三名が鐵條網を持つて第一線を超越前進したとき敵は猛烈なる射撃を集中した。敵弾がシュツと唸つて彼の右大腿部を貫き、はずみを喰つてごつと倒れた。彼は「畜生！」と起き上つて鐵條網にとりつき手當り次第に

を通つて小隊と共に敵陣に突入したことであらう。

(遺族 母 五十里をと 住所 同本籍地)

三〇 死の直前従容として最後の一弾を發射す

歩兵第三十五聯隊第一中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 漁 すなはち

豊 吉

富山縣下新川郡魚津町大字新下獵師町三九

右頬から入つた弾丸は左頬へ抜けて行つた。「おい／＼ 綱帯しようせ」と傍の戦友が叫んだが返事もなく、彼漁上等兵(當時豫備役一等兵)は血塗れの頬に床尾飯を引き付けた。——最後の「一弾」——それを基本射撃の様に撃ち終ると其儘はつたりと打伏した。「漁! しつかりしろ、大丈夫だ!」……「班長殿、敵を全滅してから死にたかつたです!」……「なわに今にあいつ等を全滅させてやる」分隊長はかう云つて慰めて居る。

二十三日の朝早く中隊の左翼へ百名を越す敵が生意氣にも密集した儘、青天白日旗を押立て、逆襲して來たのであつた。中隊は之に應戦し三十分を出でずして見る／＼殲滅的打撃を與へたが、我が右前方後郭家宅から不意に撃ち出した敵の機關銃弾に惜くも中隊の十二名を死傷せしめた。漁も其弾丸に見舞はれたのであつた。出血の爲顔は次第に青ざめ、言ふこともとぎれ／＼で分り難い。聲が出せなくなつて右手で字を書き初めた。それは次の様な意味であつた。

「幹部方によろしく」

中隊は逆襲して來た敵を完全に殲滅した。「とう／＼敵は全滅だぞ!」分隊長の聲を聞き得た彼は頷いて承知を示したが、臆て兩手を舉げてかすかに「萬歳」と叫んだ儘息は絶えた。嗚呼最後の「一弾」を頑張りし其意氣と、死の影を排して筆談した皇軍團結の麗はしき光景とは、共に平時訓練の賜であり、皇軍の必勝の信念の現はれである。

(遺族 母 漁もと 住所 同本籍地)

歩兵第三十五聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳七等 功七級 永井良藏

富山縣下新川郡新屋村新屋四二二七

上海附近の戦闘將に酣ならんとする二月二十一日、永井伍長(當時豫備役上等兵)の所屬第十一中隊は、孫家宅より願家宅に互る敵の堅壘を奪取せんと、敵彈を冒しつゝ、攻撃陣地の構築を急いだ。此時聯隊長は第一線敵狀視察中にて、恰も彼の指揮する壕の彼方に在つて「大隊本部の位置を知る者は無いか?」と問はれた聲に、彼は壕を跳出して其誘導に任じたが、折柄飛び來つた敵彈は彼の左胸部に命中し盲管銃創を受けた。併し勇猛心と責任感に燃ゆる彼は毫も屈することなく、彼處此處と指しつゝ、一米許り歩を進めたが、遂に力盡きてはつたりと堆土の彼方に俯伏した。此時偶然か天祐か、戦線に立つて相見ゆるの機會が未だ一度も無かつた弟(豫備役歩兵上等兵永井健治)が傷ついた兄の邊

を過ぎ行かんとした。轟々たる銃砲聲の裡に「永井上等兵、傷は浅いぞ」と叫ぶ高い聲を耳にした弟が、はたと走り寄りよくよく見れば紛ふ方無く、一度再會を希つて居た懐しい兄であつた。

變轉極り無きは戰場の常とは謂へ、餘りにも變り果てた兄との奇しき對面、涙無くして誰か此劇的光景を見られよう。「弟か! 君國の爲め散り行く俺はかまはぬが、突撃奏功を見ずして斃れるのが心残りだ、俺の最後の頼みだ、喃弟、俺の仇は屹度打つて呉れよ、頼むぞ!」と言つたが彼の語尾は次第に鈍つた。

註、弟健治も兄の戦死の翌日(二十二日)江灣北方願家宅附近の戦闘に於て右大腿部貫通銃創を受け、第九師團野戦病院に收容せられたが、三月十日治愈退院、伍長に進級して榮ある凱旋をした。

嗚呼天晴帝國軍人たるに恥ぢぬ兄弟である。殊に兄の臨終こそ不滅の軍人精神が輝いて居る。

(遺族 父 永井久次郎 住所 栃木縣上都賀郡足尾町切幹三一八)

三二 小隊の前進が困難になると常に散兵線前にとび出して激勵す

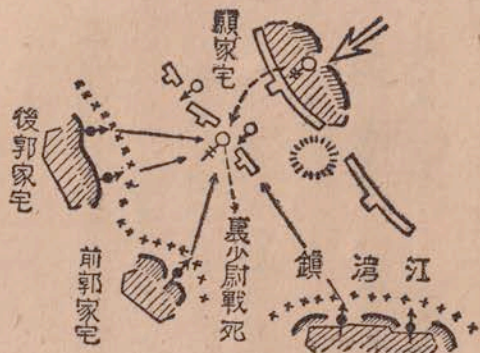
歩兵第三十五聯隊第九中隊

故陸軍歩兵少尉 正八位
勳六等
功五級

裏 甚 作

富山縣氷見郡余川村八三四六

小隊の前進が困難になると裏少尉(當時特務曹長)は散兵線前にとび出すのを常として居た。上海附近の激戦に於て二月二十一日朝、大隊が西部願家宅を夜襲したとき、第一線小隊長となり、小隊の最前方に出て勇戦奮闘、よく部下を指揮し遂に完全に敵陣地を占領した。大隊が続いて後郭家宅の敵陣地を奪取せんとした時、我が夜襲企圖を察知した敵は前郭家宅、後郭家宅から猛烈な十字火を集中した。茲に於て大隊は一時停止の止むを得ざるに至つた。少尉は絶えず小隊の最前線に於て部下を誘導し、願家宅附近竹藪の縁に於て前進の機を窺つて居たが、飛來つた一弾に胸部を貫通せられた。併し剛毅なる少尉は少しも撓まず「天皇陛下萬歳！」を唱へ尙部下を激勵して前進せしむべく志氣を



鼓舞して居たが、一弾又一弾と続けさまに彼の腹部を貫通するや、流石剛勇の士も遂に聲を呑んで殞れたのである。

二十日の孫家宅附近よりの前進以來、小隊の散兵線前にとび出す小隊長の姿が、如何に部下の志氣を鼓舞して居たかは想像に難くない。

少尉は近く任官すべき少尉候補者であつて、責任觀念旺盛にして服従心に富み、第九中隊に於ける唯一の現役小隊長であつた。少尉は嘗て士官學校學生當時戰術教官から教へられた戰場心理をよく下士官以下に徹底せしめた。出征に當つては家族に訣別の暇もなく廣島に先發し、船舶輸送業務に盡瘁したのであるが今や護國の神と化した。

(遺族 妻 裏ななせ 住所 富山縣氷見郡稻穗村稻穗一九四四)

三三 機關銃手の本懐、死せども銃把を離さず

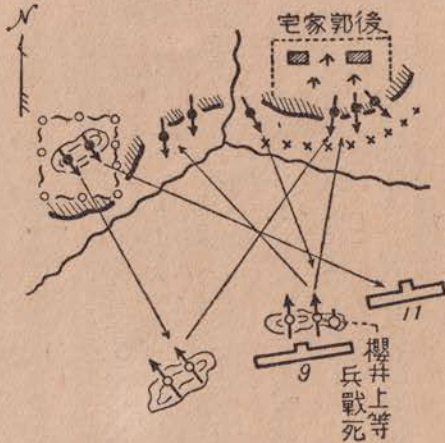
歩兵第三十五聯隊第三機關銃中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功六級 櫻井 信孝

富山縣射水郡二塚村林新一三一

射手たる櫻井伍長(當時豫備役上等兵)が射撃しない、分隊長が「おい〜」と注意したとき彼の息はもう絶えて居た。頭部貫通銃創を受けて即死したのであつたが、銃把を固く握つた儘姿勢も變つて居なかつた。

時は二月二十五日、上海附近郭家宅に於て第二次攻撃開始の日である。櫻井伍長は分隊の射手として大隊の最前線にあつて射撃中、顔面と両手に數箇所砲彈破片を受けた。流るゝ血潮は淋漓として絨衣を紅にした。分隊長が射撃交代を勧めたけれども、彼は頑として應ぜず、依然として射撃を續けた。其中又も飛來した一彈に彼は致命傷を負うて聲もなく逝いたのであつた。



機關銃手の本懐として之に過ぎたるものなく、嘸喜んで死んだことであらう。

其頃彼の實兄は第十中隊の小隊長として最前線にあつて突撃發起の時期を窺がつて居たのである。

伍長の實兄は僧侶であり、伍長の死骸に黙禱を捧げて涙一滴も流さなかつた。喜んで任務に斃れた亡弟の心中と琴線相觸れる

ものがあつたからであらう。

去る一月の或日、大隊長板津少佐が賀越電鐵に乗つた時、車掌がツカ〜と大隊長の側に來て「何時動員が下りますか、下りましたら早く知らせてください」と言つた。此車掌こそ今日郭家宅の地下に堅く銃把を握つて笑顔に眠る櫻井信孝其人であつた。

(遺族 父 櫻井專誠 住所 同本籍地)

三四 引鐵に指を掛けた儘、床尾を肩に据えた儘

歩兵第三十五聯隊第十中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 北村 秀雄

北海道斜里郡斜里村字秋ノ川西五線六四

彈著は遙に遠い、目標の前後に立上つてゐた土煙が今はずつと敵散兵線の後方に移つた。おかしいと思つた分隊長は射手を呼び續けた。「北村！北村上等兵！おい北村！」土饅頭の蔭に引入れて檢べたとき彼(當時上等兵)の鐵帽には柘榴の様な孔が穿いてゐた。「やられた」とも云はず彼は其持場に於て任務に殉じたのであつた。引鐵に指を掛けた儘………床尾を肩に据えた儘………兩肱の位置も變へずに、只頭丈け地に俯伏して居た。死すとも尙止まざる北村伍長の攻撃精神は天晴れ帝國軍人の華である。

(遺族 父 北村良藏 住所 同本籍地)

三五 なあに敵彈の二發や三發、此時機に繃帯なんかして居られるかい

歩兵第三十五聯隊第十中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 堀 田 幸平

富山縣東礪波郡出町太郎九五〇二五

昭和七年二月二十一日午前八時稍前、願家宅附近敵陣地前百五十米に於て三發目の敵彈が頭を撃ち貫いたので、流石の堀田伍長(當時豫備役上等兵)もとうとう俯伏してしまつた。彼は輕機關銃分隊の射手として願家宅の敵を射撃すべく前進して來たが「あの土饅頭へ前進」との分隊長の命に、更に一躍進を始めようとして進み出た刹那、大腿と胸とを同時に敵彈に射ち貫かれ、機みを喰つて挫と其場に打ち倒れた。出血が甚しいが此暴露した處では繃帯することも出来ない、銃を抱へて起上つた彼は、よろ／＼しながら前の土饅頭迄取付いて來た。「繃帯をしてやらう」と分隊長が言つたが、彼は斷つた。「なわに敵彈の二發や三發、此時機に繃帯なんかして居られるかい」と堆土の斜面に脚を

据えて射撃を開始した。續いて小隊の火線は區分躍進で追ひ付いて來た。分隊長が「彈著よし」と云つた其瞬間飛來つた一彈は彼の鐵帽を射貫いて、此勇士に聲を出す暇も與へなかつた。此輕機關銃分隊は本戦闘に於て射手を交代すること四人、遂には小隊長迄自ら分隊長をやつたのであるが、堀田伍長は其最初の犠牲者であつた。

(遺族 母 堀田そのゐ 住所 同本籍地)

三六 眞の勇者は情に厚く、義に強し

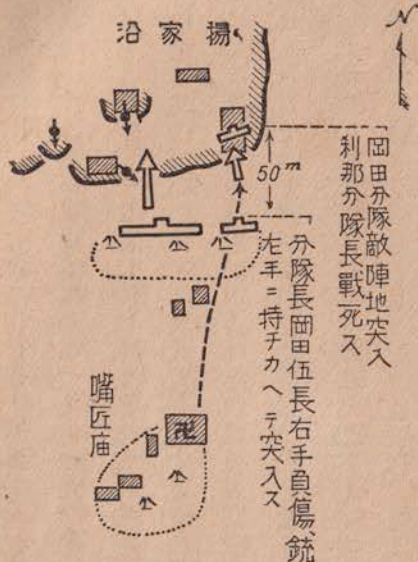
歩兵第三十五聯隊第六中隊

故陸軍歩兵伍長 勳七等 功六級 岡田 愿 びん 三

岐阜縣大野郡高山町大字三町一二一三

昭和七年三月一日上海第三次攻撃に於ける揚家沿の戦闘である。敵前五十米の突撃發起壕より喊聲を擧げて敵陣地の要點に突撃した岡田伍長(當時豫備役上等兵)の率ゐる分

隊は、死傷續出し、分隊長が「突込め!」の號令をかけたときには續く者は只二名であつた。併し乍ら之に屈せず猛虎の如く突入しつゝ、あつた彼の右手にハッシと敵彈が命中した。彼は即座に銃を左手に持ち換へて遂に敵の胸牆に足をかけたとき、機關銃彈と手榴彈とが同時に彼の頭と胸とを碎いた。彼は胸牆上に倒れたが、此勇壯なる突撃の犠牲は



空しくはなかつた。この分隊の勇敢な行動に氣を奪はれた敵は、我が主力の爲背後に迫られつゝ、あつたのに氣が付かなかつた。敵が前門の狼たる岡田分隊の突入を漸く阻止して後を振り返つたときには、既に後門に迫る虎は林の如き銃劍を彼等の背に擬して居た。か

くて大久保中隊は完全に揚家沿の敵を殲滅して二十三周に向ひ前進した。

伍長は平生は無口な而も柔和な士であつた。彼が應召の時は令状を受けて所定の入隊日を待ちきれず、一日前に隊に来て舊教官に挨拶して廻つた。彼は征途に上る二、三日前に結婚したのであつた。平素大言豪語する者に眞の勇士は尠い。此處に彼の生涯を物語るに足る麗はしい挿話がある。それは彼が在隊當時の或日、某戦友が失業を悲觀して自殺せんとしたのを彼が酒保で發見し、之を救うて自分の家に使つてやつた。今次の出征には此主従の戦友が手に手を取つて参加し、共に目醒しく戦闘に従つて居たが、主人側の岡田が悲壯なる戦死を遂げたのに反し、援けられた戦友は死所を得ずして凱旋することになつた。彼は「兄さん（岡田伍長のことを常に兄さんと呼んで居た）が死んで私人歸られない」と深き意ひに沈んで何事か心に決して居た。此情況を知つた岡田伍長の父親は中隊長に呉々も彼の身邊に注意せられ度く申し出でたのみならず、彼が除隊の日には態々兵營迄迎へに來たと云ふことである。父親は常々「私は息子に教へられました」

と人に語つて居た。實に麗はしい挿話ではないか。

岡田伍長については更に一つの戦場挿話がある。彼が戦死の前小隊長が「俺と一所に突撃する者は手を挙げよ」と言つた時、伍長は大聲一番「一所には突撃しません」と叫んだ。小隊長は「何故か？」と詰問的に問ひ返へした所「小隊長殿より先に突撃します」と答へたと云ふ。

凡そ情に厚き者は義に厚い。岡田伍長の生涯は盡く軍民の教訓である。

(遺族 父 岡田肥吉 住所 同本籍地)

三七 此彈丸を……早く……送つて呉れ

歩兵第三十五聯隊第三大隊本部

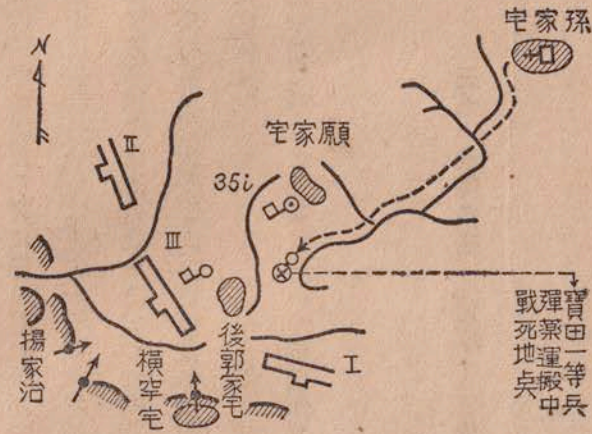
故陸軍輜重兵一等兵 勳八等 功七級 寶 田 才 松

富山縣下新川郡上原村上野四二三四

渡河材料たる藁を擔いだり、彈藥箱の重いのを荷つたりして、大きな目標を敵に曝露

しつゝ、第一線に出て来る輜重兵の行動は、第一線將兵の感激措かざる所であつた。夜遅く飯を持つて來て呉れたとき、石油罐に詰めた飲用水を壺塚に運んで呉れたとき、戦線にある者が如何程喜んだことか。

昭和七年二月二十六日後郭家宅へ行く途中暴露した所で實田一等兵(當時輜重兵特務兵)は敵彈に胸を貫通され「やられた」と叫んで倒れた。其聲を聞いて同僚が馳せ來り、綱帶を施さんとしたとき微かに口を開いて「此彈丸を……早く……送つてくれ……第一線



は……激戦だ……」と吐切れ〜に言つたが、之が彼の最期の言葉となつたのである。

此戦闘に於ては機關銃中隊の彈藥補充は人力によらねばならなかつたが、機關銃中隊の人員のみでは到底間に合はぬので、大隊長は小行李の人員より特務兵十八名を機關銃中隊に増加配屬して、臨時彈藥小隊を編成したのであつた。

斃れても猶已まざる實田一等兵の旺盛なる責任觀念こそ皇軍の軌範である。

(遺族 父 實田金次郎 住所 同本籍地)

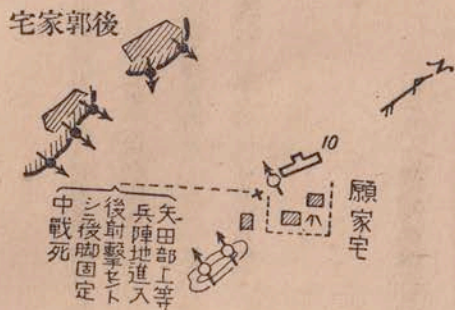
三八 最期の叫び「後脚の位置」

歩兵第三十五聯隊第三機關銃中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 矢田 部榮松

富山縣氷見郡氷見町地藏三二六ノ七

矢田部上等兵(當時豫備役一等兵)は最期に方つて「後脚の位置」と切れ／＼に三回連続に叫んだのであつた。



前百米、而も敵は豫て標定して居たらしく猛烈なる機關銃及小銃火を集中する。其彈

二月二十二日上海附近願家宅部落も我が手に陥ち、聯隊は前、後郭家宅の線に攻撃目標を定め鋭意攻撃に力めたが、戦況は意の如く發展しない。聯隊は師團の最左翼であり、江灣鎮からの側射を受けて、損害續出するのみであつた。午後「聯隊の名譽の爲、全滅を期して突撃を執行せよ」と聯隊長の命があり、大隊長板津少佐が第十中隊をして後郭家宅の敵陣近く突撃陣地の構成にとりかからしめたとき、彼の小隊は第十中隊に配屬を命ぜられ、午前一時願家宅西端の墓地に陣地進入した。此地點は敵

道も低く射撃も正確である。併し今は一刻も猶豫すべき時機ではない。彼の分隊は敵弾に暴露しつゝ、黙々として銃座を構築してゐた。彼が機關銃の脚を据付け後脚の位置を固定中、一彈飛來して頭部を貫通した。

「天皇陛下萬歲」と叫んで其場に倒れた時戦友は始めて彼の負傷に氣がついた。彼が昏睡状態に入る前に苦しい息の中から叫んだのが「後脚の位置」の三回連続であつた。彼は死ぬまで自分の任務を忘れなかつたのである。

(遺族 妻 矢田部もみち 住所 同本籍地)

三九 看護兵負傷せる戦友の爲掩體を構築中敵弾に死す

歩兵第三十五聯隊第十一中隊

故陸軍三等看護長 勳八等 功七級 山形猛比古

富山縣下新川郡内山村二一一八

上海會戰の末期に於て昭和七年三月四日、徳野支隊が黃渡より高墩頭を経て方泰鎮方向の敵を撃退すべき任務を以て前進するや、山形看護長(當時豫備役上等看護兵)の所屬第十一中隊は徳野支隊の左側衛となり、黃渡驛附近の敵を撃破し之を西方に追撃中であつた。時恰も足部に負傷せる戦友を收容しつゝ、あつた彼は、此時已に戦友の歩行不可能なるを知り、自ら戦友の器具を卸し、敵彈雨注の下に吾身の危険をも顧みず、戦友の爲に掩體を構築して居たが、不幸にして敵彈は彼の腹部に命中し、戦友を救はんとして自らも共に殞るゝに至つた。

惟ふに看護長の死は任務の爲に、戦友の爲に、全く吾身の危険を顧慮することなく力を盡して犠牲となつたものであつて、一般に責任觀念弛緩せる方今に於て誠に國民の鑑として永く後世に傳ふべきである。

(遺族 妻 山形きよ 住所 同本籍地)

四〇 壕の一角に腰を下し、敵彈下に作業を指揮す

歩兵第三十五聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵軍曹 勳七等 功七級 山田清平

富山縣東礪波郡高瀬村高瀬七二四

戦塵渦巻く上海附近の會戰は進展して二月二十九日となつた。第一次補充員として山田軍曹(當時豫備役伍長)は第十一中隊へ配屬を命ぜられた。萬物凍る酷寒の江南であり、剩へ敵陣を距る二百米の近距離、敵彈を冒しつゝ突撃陣地を構成するのは至難の業と云はざるを得ない。

二十九日の夜は更け、工事も漸く進捗した。「夜が明けたならば工事は出來なのだぞ」と腰を屈めつゝ壕に沿ひ注意して歩く奥原特務曹長の底力ある小聲に勵まされ、壕の構築は一段の進捗を告げた。此時彼方を振り返つて見れば、山田軍曹が壕の一角に腰を下し分隊の兵を督勵して居た。其餘りの大膽さには一同も啞然とした程であつた。

斯くて悽慘の一夜を明けて、三月一日の第三次攻撃の日となつた。午前十一時戦機は熟し、中隊長の叫ぶ突撃の號令と共に彼は突撃陣地を跳び出した。敵は猛烈に射撃を開始し雨、霰と飛び来る彈丸の中にあつて、彼が巨大の體軀を提げて進め〜と叫びつゝ、己の分隊を叱咤激勵してゐた様は鬼神の如く感ぜられた。かくて敵を撃破し、遠く西方に追撃したのは聯隊長徳野大佐の指揮する徳野支隊である。

三月四日「黄渡に敵在り」との急報を得て、支隊は夕闇迫る頃、黄渡停車場より敵陣地に肉迫した。遮蔽する地物なき曠野の爲に各分隊の前進は自然と鈍り勝ちである。此時雨の如き敵彈下を黙々として前進を敢行して居る一分隊がある。それは勇敢なる山田分隊であつた。此夜彼は高墩頭附近より敵狀搜索の任務を帯びて出發した。暗黒の道を辿りつゝ、鐵橋の下に至り、地形の状態を探つて居たが、此時飛び來つた敵彈に胸部貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

彼の肉體は惜くも長江の彼方に埋れるに至つたが、彼が貽した忠烈は永く後昆の龜鑑

として皇國の上を照らすであらう。

(遺族 妻 山田シゲ 住所 同本籍地)

四一 闇夜敵彈下を駈ける黒い影

歩兵第三十五聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵曹長 勳七等 功七級 東野 東野の 密太郎

富山縣射水郡本江村本江一三三二

物凄い彈丸の唸り、轟然天地を覆へす砲彈の炸裂、眞に激しい阿修羅の巷である。時は昭和七年二月二十一日午後六時、我が軍は敵の第一線陣地へ百米の至近距離迄接近して、一擧に敵陣地を占領せんものと、未明より猛烈に射撃を始め、最初のうちは前進に次ぐに前進を以てし破竹の勢で進んだが、時を経るに従つて敵彈益々加はり、我が死傷續出して奏功を見ざる内にその日も暮れた。

將兵は互に無念の涙を呑み、一刻も早く突撃に移らんことを希ひつゝ、手に汗を握つて命令の來るを待つた。如何な敵兵も夜陰の射撃は然程にもあるまいと思つて居たが、事實は全く反對で、暗夜に飛ぶ榴散彈、時を移さざる重機關銃の猛射、當もない小銃の盲射ち、戰場は愈々悽慘の狀を増すのみであつた。今は詮方なく壕を掘つてそれに身を寄せた。誰一人として動く者も無い。

「ア、危い、あれは誰だ？」突然傍で誰か頓狂に叫ぶものがある。見よ暗夜に走る一つの黒い影、走つては伏せ、伏せては走る、雨と降る彈丸を縫ひ乍らやつて來る鬼神……「誰だらう」と、驚愕の目を瞪りながら黒影に注意を寄せる瞬間、敵陣地より烈しい機關銃の銃聲が起つた……黒影は何處かへ消えた。「あゝ残念！誰か知らんがやられたのだ」と皆が囁いた。稍々あつて又黒い影が動き出した。天馬の空を駆ける如く飛んで來る。「未だ生きて居るぞ」隊長以下此處に居合せた者は安堵の胸を撫で下した。「東野軍曹だ」やがて彼が我が陣地に著いた時、將士は代る／＼彼の勞を謝した。大隊本部より

聯隊本部へ連絡に行つた其歸途であつたのである。此大任を果し終へた彼は一時夢路を辿るが如くであつた。此難關を突破した鬼神東野曹長(當時軍曹)の神祕的活動がなくてはと、彼を取り圍んだ勇士は唯々感激に打たれるのみで、しばしの間沈黙が續いた。

かくの如く曹長は中隊の命令受領者として常に大隊本部と中隊との間を危険を冒して往復して居た。上海附近敵陣地に對する第二次攻撃が始まるので、命令報告は平常に比し頻繁であつた。彼は其命令をば機を失せず中隊へ傳へた。午後三時過大隊が後郭家宅に突撃するや彼は本部と共に突入し、敵前百二、三十米に於て頭部貫通銃創を負ひ倒れた。曹長は重傷にして再び起つ能はざるを知つたとき、天皇陛下萬歲を唱へて頭を垂れ、英靈は遂に天に昇つた。

中隊は曹長の活動に依つて、今日まで常に有利な態勢を以て攻撃を行ふことが出來たのである。

斯の如き戰場の勇者東野曹長は、不斷は兵より眞實の母の如く慕はれ、又懷しまれて

ゐた。休日には時に兵と共に山へ川へと行樂を共にするかと思へば、一旦教練、劍術、射撃等に臨めば徹夜の意氣込で其課業に親しんでゐた。

(遺族 妻 東野サヨ子 住所 同本籍地)

四二 突入する中隊長の背後に聞えた「天皇陛下萬歳」

歩兵第七聯隊第二中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 小野 甚一 雄

石川縣石川郡中興村字倉光庚一八一

昭和七年二月二十一日江灣驛附近の攻撃を命ぜられたる歩兵第七聯隊第一大隊は彈雨を冒して前進を續けた。脚下に落下する彈丸は不氣味な音を立て、土煙を跳ばして居る。第二中隊は大隊の第一線として煙幕を利用しながら前進した。突然敵陣地の一角に異様な喇叭が響いた。

敵の射撃はバツタリと止んだ。敵は毒瓦斯と誤認したものらしい。「突撃！」中隊の將兵一同は此中隊長の命令を待つ間も遅しと、先を争つて敵の據れる獨立家屋に突入した。中隊の先頭にあつた中隊長辻中尉が其直後に於て「天皇陛下萬歳」といふ叫び聲を耳にした。突入の後戰場を搜索して見ると、突入點で最も勇敢に奮闘して居た小野伍長(當時上等兵)が、左手に擲彈筒を、右手に銃を持つた儘、頭部に貫通銃創を負うて戦死をして居た。

先の萬歳は實に此勇敢な小野伍長の此世に於ける最後の言葉であつたのだ。期せずして發した信仰の結晶であつた。皇軍の將兵が死に臨んで叫ぶことは、陛下の萬歳である。日本人の血の流れて居る限り、天皇中心の信仰は永久に不滅である。

幾多の勇士が此世の別れに残す言葉は南無阿彌陀佛でもなければ、南無妙法蓮華經でもない。唯、天皇陛下の萬歳である。

(遺族 父 小野八十二 住所 同本籍地)

四三 先づ俺が一番に戦死する覚悟だ

歩兵第七聯隊第一機關銃中隊

故陸軍歩兵曹長 勳七等 中 嶋 重 義

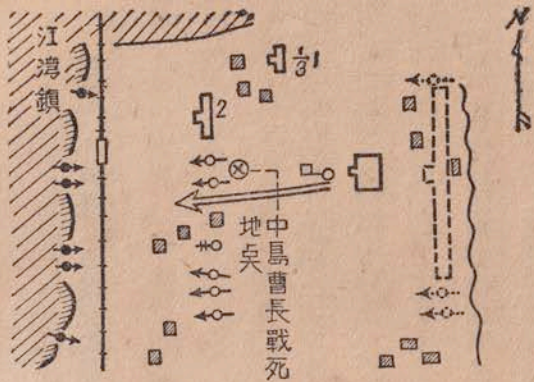
石川縣鳳至郡柳田村字北河内子部一一二

中島曹長(當時軍曹)は仙臺教導學校第二期卒業生であり、性快活敏捷で機智に富んだ人であつた。

彼は昭和七年二月十四日吳淞鎮上陸以來、多忙なる軍務に進んで服し、諸勤務には精勵し、能く上官を輔佐した。二月二十一日江灣鎮の戦闘に於て連日の疲勞をもものともせず、第一機關銃中隊第一分隊長として奮戦したが、戦闘前彼は部下分隊一同に對し次の注意を與へ激勵した。

「今日は愈々機關銃の特性を發揮すべき秋である。一同勇躍して戦闘に臨め、名譽ある軍旗の許に在つて、之に恥ぢない様に努力せよ。先づ俺が一番に戦死する覚悟だ。自分

の物入に彈藥箱の鍵を入れてあるから之を忘れな
い様に、尙戦死後と雖一同は皇國の爲に能く奮
闘せよ。」



江灣鎮攻撃に際しては中島分隊は中隊の最右翼
に位置し敵の側方よりする射撃に對し能く之に應
射制壓し、我が第一線部隊の攻撃前進を容易なら
しめた。第二中隊の江灣鎮東側占領に際しては、
機を失せず該地に進出し、之が確保を容易ならし
むる爲、右側方よりする敵火を制壓せんとしたが、
部下分隊の死傷者續出したので、曹長自ら銃を指
向し敵を猛射して居た。此時不幸にして敵の一彈は彼の頭部を貫通した。此時曹長は
陛下の萬歳を三唱しつゝ、兩手を舉げたる儘絶命した。戦闘前から深く決する所なくして

は、かくも見事な戦死は遂げられないであらう。

(遺族 父 中島庄太郎 住所 同本籍地)

四四 小隊長たる義兄の重傷を見つゝ依然射撃を繼續す

歩兵第七聯隊第六中隊

故陸軍歩兵伍長勳八等
功七級 中村 重 榮

石川縣能美郡吉田村字東任田口九六

昭和七年三月一日上海第三次攻撃が開始せられ、彈丸は雨霰と飛び、彼我砲彈の炸裂する音は耳を聳するばかりであつた。第六中隊前面の硝煙僅かに霽れた時、小隊長北野曹長が横罕宅の状況如何と頭を上げた折、敵彈鐵帽を貫いて後頭部に貫通した。側近に在つた村田、山本兩軍曹が鐵帽貫通の音に見かへると、小隊長の顔面紅潮し肩先一面眞紅に染つて居た。直に萬壽上等看護兵と共に應急の處置を行つたが鮮血は三角巾を透し

て迸る。敵彈は愈々激しい。

第四分隊の射手中村(當時上等兵)は分隊長の情ある命により小隊長の許に匍匐して進んだが、其顔を覗いたのみで無言のまま、歸つた。彼は再び輕機關銃を執つて確實なる射撃をなし前面の敵を猛射した其様は實に沈著であつた。此時地形偵察に先行して居た分隊長は手を舉げて前進を促したので、伍長は之に應じ將に起つて前進に移らんとした時、敵彈は彼の腹部より左脚の末端に近く侵徹し、どつと許りに倒れた。彼は死力を盡して再三起たんとするも起つ能はず、第一彈藥手が射手を交代して前進した。第五彈藥手は彼に手當を行はんとしたが、「敵退却の微あり、俺の傷は浅い。早く分隊長殿の許に至り、一致團結して之を撃滅し、自分の分も働いて呉れよ。早く、早く行け!」と却つて戦友を促した。其彈藥手は後髪を引かるゝ思ひを以て前進した。

戦闘も終り南翔に薄暮の迫る頃、戰場掃除隊の一兵は中村上等兵の鮮血が草を紅に染め、其重傷せし位置より約七十米許り小隊長に近づいて死んで居たのを發見した。

小隊長の夫人は上等兵の姉であつて、小隊長は伍長の義兄に當るのである。

彼は射手たるの責務を完うし、私情を捨て義兄の看護も行はず、只顔を見たのみであつた。又其身自ら致命傷を受くるも苦痛を忍んで戦友を勵まして前進せしめた責任觀念と、死の直前に於ても小隊長の看護に赴かんとした其心情は實に軍人の鑑である。

(遺族 父 中村次助 住所 同本籍地)

四五 自己の重傷を忘れ上官を思ひつゝ戦死す

歩兵第七聯隊第二中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 後川榮太郎

石川縣石川郡犀川村字二俣ノ二〇

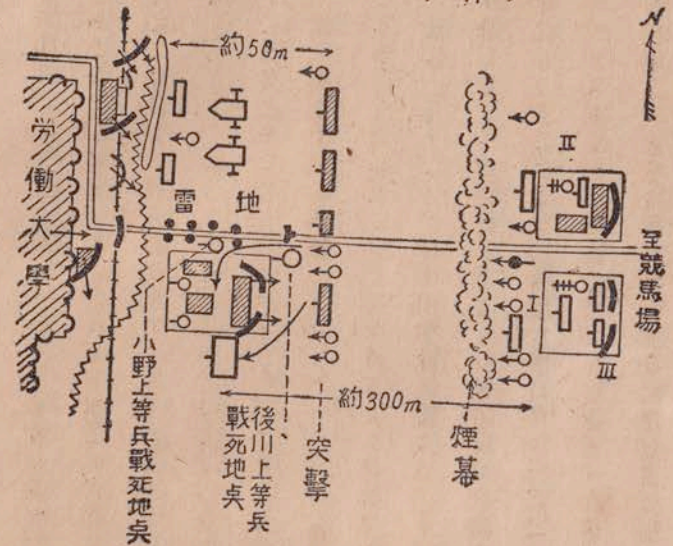
上海方面の事態急を告げ第九師團に動員令下るや、郷に在つた後川上等兵(當時豫備役一等兵)は二月四日勇躍應召し、吳淞上陸以來遠東運動場に於て警備勤務に服し、常

に進んで危険困難なる任務に當り、歩哨斥候或は傳令として能く其任務を完うした。

二十日拂曉土田將校斥候に屬して王家宅附近の敵情地形を偵察するや、上等兵は敵彈下を沈著機敏に活動して斥候長を助け、其重要なる報告を携へ、大なる危険を冒して迅速に大隊長に提出し、大隊の戦闘指導を有利ならしめたのであつた。

二十一日江灣鎮攻撃に際し午前十時三十分、中隊は攻撃前進の命令と共に猛烈なる彈雨を冒し、戦車と協力して前進を開始したが、敵の射撃により我が前進困難となるや、中隊は豫て準備した煙幕班を以て發煙筒により中隊の全正面に煙幕を構成し、逐次之を推進しつゝ躍進を續行した。敵の射彈漸く亂れた。折しも敵陣地の一角に異様に不氣味なる喇叭が響き渡り、且攻撃目標なりし獨立家屋の敵は射撃を中止したので中隊は此機を逸せず突入した。(敵は我が煙幕を毒瓦斯と誤認したもの、様である)それは午前十一時頃であつた。其陣地に在つた敵は驅逐し得たが、停車場本屋に秘匿せられたる敵の重機關銃は尙健在し、掩蓋銃眼により側防威力を恣にし、爲に中隊の死傷續出し、後川上

第二中隊江灣鎮敵陣地擊攻要圖
(二月二十二日於ルケ)



等兵も亦胸部に貫通銃創を受け
て瀕死の重傷を負った。
時に中隊突撃の状況友軍砲兵
に通せず、友軍の砲弾は尙依然
として我が突入點に集中せられ
て居た。土田少尉は戦死せる部
下の銃を取つて日章旗を結著
し、彈雨の中にすつくと立ち上
つて友軍砲兵に射程延伸を要求
した。此時足下に横たはつて居
た瀕死の後川上等兵は土田少尉
の危険を慮り身の重傷を忘れて

少尉の足を握り「教官殿姿勢が高いです」と連呼しつゝ、瞑目したのである。
自ら將に死なんとしつゝ、一言も其苦痛を訴へることなく上官の危険を思つて其足に絶
りついて逝いた此心情、實に麗はしい限りである。

(遺族 父 後川作太郎 住所 同本籍地)

四六 電話必通の信念

歩兵第七聯隊通信班
故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 上 出 正 雄
石川縣江沼郡作見村字弓波イノ二六

昭和七年二月二十日は愈々上海第一次攻撃開始の日である。當日午前三時、月は皎々と冴え、吹く風は氷の如く冷い。曉の霜を踏んで全軍の貔貅一齊に行動を開始した。聯隊は旅團の左第一線となつて江灣鎮方面の敵陣地に對し攻撃し、午前十時頃戦友が前後

に倒れる中をも敢て怯まず、突撃又突撃、正午頃江灣鎮の一角を占領するを得た。併し死物狂ひの敵は頑強に抵抗し、我が通信連絡は一時断絶するに至つた。茲に於て細谷通信班長の面には悲壯なる決心が現はれ、一同は先を争ひ、殊に上出上等兵（當時一等兵）は欣然として率先作業班に加はり、硝煙彈雨を潜つて只管連絡の完全を圖つた。是等の勇士に天も感じてか、全員不思議に微傷だも負はず目的地に到着して、聯隊本部と第一大隊間の電話連絡を完全ならしめた。夜に入るに従つて地の利を得た敵は、諸方より猛烈なる射撃を浴びせたが、聯隊は旅團命令に基き一部を殘置し、主力を競馬場に集結して夜を徹した。明くれば二十一日戦闘益々激甚である。堅固なる煉瓦、「コンクリート」の高層建物を利用し、加ふるにクリークを縦横に有する江灣鎮停車場附近の敵陣地は、敵の天險と恃む所であつたが、我が攻撃によつてその一部を占領した。友軍部隊の突入に際し、五十米前方の近きに在る敵の自動火器は猛烈なる射撃を浴びせ、鮮血は忽ち大地を染めた。擔架で運ばるゝ戦友に一別する暇もなく、上出上等兵は第一線の近くにあ

つて、時々刻々戦況の變化を聯隊本部に報告して居たが、折しも軍の命脈と頼む電話線は敵弾に切断された。時正に二十一日午後一時、敵の迫撃砲は狂氣の如く亂射亂撃する。併し軍の命脈たる電話線は死を以ても確實ならしめねばならぬ。されど見す／＼愛する部下を殺すは情に於て忍びないとの悲壯なる面持を以て指導班長中川軍曹は部下を見渡した。其時早くも班長の苦衷を察した上等兵は敢然として壕を跳び出した。傍に居つた兵は「それつ！上出一人のみ殺してはならぬ。死なば諸共に」と先を争ひ、敵前に身を曝しつゝ勇敢なる敵彈下の作業に死力を盡した。敵の機關銃火は行く手に集中せられたが、死を決した彼等には只任務あるのみである。線を辿りつゝ約三十米の地點に達した。上出上等兵は斷線箇所を發見し、直に修理をなし、右手を高く上げて終了を告げ「導通點檢しろ！」「よし通する」と茲に於て完全に責任を果したが、此時不幸敵の一弾は彼の胸部を貫通した。「あつ！残念！」と叫んで彼は打ち倒れた。嗚呼忠勇義烈の上出上等兵は硝煙彈雨の中に在つて一身を顧みず、克く己が任務を遂行し、其職務に殘れた

のである。時に午後一時三十分。彼の最期は通信手の電話必通の責任觀念を示した尊い精神の躍如たるものがある。

(遺族 父 上出七藏 住所 同本籍地)

四七 危険を冒し分隊長身敵斥候を捕獲せんとす

歩兵第七聯隊第六中隊

故陸軍歩兵伍長 勳七等 功七級 柿 本 他 一

石川縣金澤市諸江町タ一二〇

昭和七年二月二十五日第六中隊は第九師團の豫備隊より第一線に増加を命ぜられ、同日午後七時頃歩兵第三十五聯隊第一大隊の左に増加し、嚴家楷敵陣地前四百米附近の幕地に攻撃陣地を構築した。此時柿本分隊は中隊の最左翼にあつて作業に従事して居たのである。

午後十時敵斥候偶々柿本分隊の前方に現るゝや、勇敢なる柿本伍長(當時豫備役上等兵)は作業中の圓匙を手にした儘塹壕内より跳出さんとした。某兵が之を認め「分隊長殿危険!私が行きます」と分隊長の身を案じて制止したけれども「いや、お前等は折角壕を掘れ、俺が確めて来る」と言ひ残し、部下思ひの柿本伍長は自ら敵斥候に近づき之を捕獲せんとしたが、敵は拳銃を取り出し抵抗したので、機敏なる柿本伍長は手にした圓匙を以て素早く頭上に一撃を加へて敵を其場に昏倒せしめ豫てより肌身離さず持つて居た日本刀を以て止を刺した。部下を案じ身を以て勇躍率先したる攻撃精神、敵の機先を制して一撃を加へ、而も止を刺した沈著剛膽は歎賞すべきである。

惜むべし、此勇士は三月一日師團第三次攻撃に方り、嚴家楷の激戦に於て壯烈なる名譽の戦死を遂げた。

(遺族 父 柿本庄左衛門 住所 同本籍地)

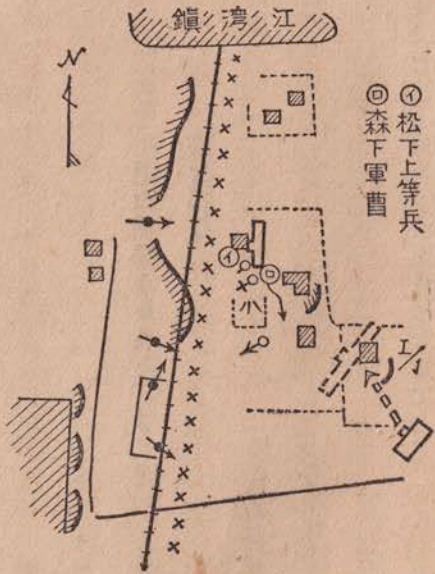
四八 部下を脊負ふて共に敵弾に殞る

歩兵第七聯隊第一中隊

故陸軍歩兵軍曹 功七級 森 下 伊 一

石川縣石川郡河内村字福岡長二〇

昭和七年二月二十一日上海第一次攻撃に於て、第一大隊は江灣鎮の攻撃に當り、右斜前方坑工建築物内より自動火器の猛射を受け、前進甚しく困難を來した。午前九時大隊命令に依り、北村小隊は戰車隊掩護の下に即刻出發、該建物を燒却し敵を掃蕩すべき任務を受け、猛烈なる敵の十字火内に奮進した。森下軍曹(當時豫備役伍長)亦分隊長として勇躍之に従ひ、決死的點火作業に従事して其第一目的を達成したが、更に其後方に點在する各家屋よりする縦斜射は一段と猛烈を加へた。我に協力すべき戰車はクリークの爲適所に行動すること不可能となり、左第二中隊方面に移動したので、小隊は全く孤立無援となるに至つた。茲に於て小隊長より輕機關銃分隊掩護の下に獨力を以て作業を繼續



すべきを命せられ、軍曹は率先して敵火網内に跳び込み、點在家屋に逐次點火して之を灰燼に歸せしめ、一時其射撃を沈黙させたが、其後方停車場附近にも機關銃を有する堅固なる敵陣地があつて頑強に抵抗し、我が大隊主力方面に對し熾烈なる側防火を浴びせて

居た。樹間より之を發見した軍曹は、獨斷を以て生籬を利用して其敵前十五米の地點に近接し、該陣地の配備特に側防火の所在を具に偵察して之を小隊長に報告すると共に、輕機關銃分隊長に通報し其行動に憑據を與へ、續いて部下を部署した。此時軍曹の近くに勇敢に躍進し敵情監視中の松下一等兵が、腹部貫通銃創の重傷を負ひ意識尙明瞭であ

つたから、之を安全地帯に移すべく擔架を求めたけれども、彼我の銃砲聲にして音聲は傳はらず、已むなく自ら之を背負つて立たんとした瞬間、敵弾は軍曹の頭部を貫き同時に松下一等兵の胸部を貫通し、遂に此沈著勇猛なる軍曹及上等兵をして護國の鬼たらしむるに至つた。

(遺族 妻 森下外代 住所 同本籍地)

四九 空閑大隊長の身邊を護つて殞れ、死に臨み報國の念に燃ゆる遺書を認む

歩兵第七聯隊第六中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 寺 本 彌 一

石川縣河北郡花園村字月影ノ八

二月二十日江灣鎮の敵陣地を夜襲せんとして、敵前に迫つた空閑大隊は敵火に曝され

つゝ早や二夜目を迎へた。不眠不休の苦闘と飢餓の爲に將兵は身心共に綿の如く疲勞して居た。其間、食を攝ること只一度、飢を覺ゆれば壕前の草を喰ひ、渴を覺ゆれば梅の實の話をして喉を潤して居た。當時大隊本部の位置にあるもの空閑少佐以下數名のみである。重、輕の機關銃はあるけれども小銃は極めて少い。此時寺本伍長（當時豫備役上等兵）は本部の傳令として大隊長の側近に居た。

午後四時、敵は我が軍の兵力寡少を侮つて逆襲して來た。伍長は胸牆上に乗り出し、彈藥の限りを盡し、斃るゝまでよく防いだが、折しも敵の一弾は伍長の胸部に命中し「あつ！」と叫んで面を伏せた。彼は暫くして面を起したが、其顔は憤怒に燃え、立ち上つて又もや銃を取り直し、身の重傷も意とする事なく戦闘を持續し、以て大隊長の身邊を警戒した。併し乍ら致命傷の身で何時まで戦闘を持續すべくもない。伍長は今は是迄と手帳を取り出し

「最早最期ノ時ガ來マシタ自分ハ國家ノ爲メ身を盡クシテ死ニマス

御兩親竝ニ愛妻ヨ長ク國家ノ爲メニ盡サレンコトヲ

天皇陛下萬歲！」と苦惱の中に之だけを記し終り、且遺物にと身につけし時計を戦友に託し静かに瞑目したのである。實に立派な働きであり、立派な最期である。

(遺族 父 寺本彌三郎 住所 同本籍地)

五〇 死所を同うせる戦友

歩兵第七聯隊第九中隊

故陸軍歩兵伍長 功七級 梶 清 次

北海道旭川市宮下通一一丁目右一

故陸軍歩兵上等兵 功六級 松 原 立

石川縣石川郡金石町字松原町七九ノ二

梶、松原の兩名は同年兵で、極めて親密の間柄にあり、就中梶伍長（當時豫備役上等

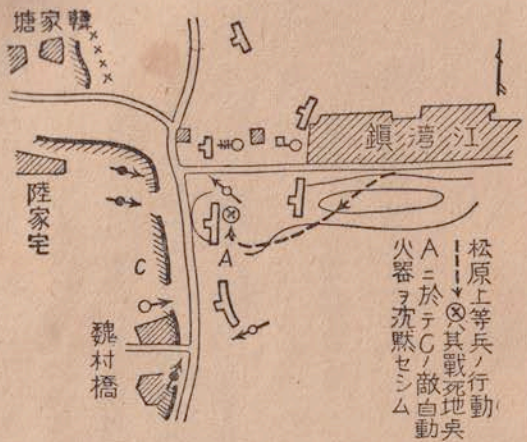
兵）は同年次兵の首席で除隊した優秀なる兵であつた。

兩名は昭和七年二月十四日上陸以來、師團司令部の警戒及師團長、幕僚等の護衛に服

し、其間互に勵まし合うて熱心積極的に勉勵し克く其任を完うした。

同月二十日よりの戦闘に方つては、率先斥候を志願すること毎日の如く、前後六回に互り之に服し勇敢に動作した。

殊に二月二十七日第三次攻撃準備に際しては、毫も勞を顧みず晝夜二回の斥候に服し、敵彈雨飛の下に勇敢に行動し、敵前四、五十米に前進して敵の自動火器及障礙物を速に發見し、克く斥候長を輔佐したのである。



松原上等兵ノ行動
Aニ於テCノ敵自動火器ヲ沈黙セシム

越えて三月一日第九中隊が第一線として攻撃陣地を推進するや、敵弾を冒して勇敢に傳令勤務に服し、攻撃前進に於ては勇躍敵前三、四十米附近に前進して交戦し、兩名共各々敵數名を殲したが、不幸にして松原上等兵(當時豫備役一等兵)は腹部に貫通銃創を受け、「天皇陛下萬歲」を叫んで其場に斃れ、梶伍長も亦右前膊に貫通銃創を受けたが、之に屈することなく突撃せんとして前進中、再び腹部に敵弾を受け、共に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

互に勵まし勵まされて其責任を盡し、一本の煙草も分け合つた戦友が、時と所とを略同うして共に護國の神と化したのも奇しき因縁であり、軍隊家庭の眞髓に觸れるものがあるではないか。

(遺族 父 梶清太郎 住所 北海道上川郡永山村四九五)

(遺族 父 松原伊三郎 住所 同本籍地)

演習 五

五一 戦友を救はんとして折り重つて殞る

歩兵第七聯隊第五中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 松村 謙 藏

石川縣金澤市鹽屋町三一

松村上等兵(當時豫備役一等兵)は縫工兵であつて、性質温順極めて真面目な、平素は寧ろ消極的な人の様に思はれて居た。

昭和七年二月二十一日午前十一時第一小隊は愈々突撃に決した。小隊長山口少尉は聲を囁らして後方の砲兵に援助を求めたが不可能であつた。併し敵は我が小隊が前進せんとして居ることを察知したのか、機關銃を以て熾んに猛射を始めた。小隊長は直に輕機關銃を一側の高地に位置せしめて應射を命じた。間もなく其分隊長八百軍曹は敵弾を受けて其場に戦死した。小隊長は先づ敵の重火器を撲滅するの必要を感じ、擲彈筒手久司上等兵をして其高地より敵の機關銃に向け射撃せしめたが、又しても久司上等兵は敵弾

に重傷を負ふに至つた。彈雨の中に久司上等兵の苦惱の聲が聞えたが、容易に出て行くことも出来ない状況であつた。其際壕を躍り出た者がある。併し間もなく微かな聲で萬歳が聞えた。全員は期せずして聲のする前方を見た。其處には久司上等兵の負傷部に繻帯を巻き付けた儘、覆ひかぶさる様に倒れた松村上等兵の即死體があつた。松村上等兵の己を殺すも友を救はんとした厚き友情に並居る者皆嚴肅なる氣分に打たれた。擲彈筒手は此突撃に當つて最も重要な任務を持つものであり、擲彈筒なくしては到底突撃の成功は期し得られなかつた。此状況を知つて居た松村上等兵は獨斷壕を跳出し、死を顧みず久司上等兵を救はんとしたのである。

(遺族 母 松村多美 住所 金澤市柿木島二九)

五二 砲車の側にて戦死したい

山砲兵第九聯隊第四中隊

故陸軍砲兵伍長 勳八等 功七級 吉田 達 治

富山縣東礪波郡野尻村野尻五六四

吉田伍長(當時豫備役上等兵)の分隊は昭和七年二月二十二日上海附近梁殷宅にあつて戦闘中、偶々歩兵第三十六聯隊第三大隊配屬砲兵となり、第一分隊に前進の命下り將に進發せんとした。此時彼は私かに獨語を言つた。「死は覺悟の上なるも砲車の側にて戦死したい」と。かくて分隊が普西東側に向ふ途中敵彈は大架馬花碇號の頸部に命中し、更に駄載品の草條多數を切斷した。之がため分隊の運動は不能に陥り、已むなく卸下して臂力搬送に著手した。吉田伍長は率先大架を搬送せんとし之を肩に載せた瞬間、敵彈は彼の頭部を貫通し此に壯烈なる戦死を遂げた。之を見た戦友は愈々敵愾心を加へ、吉田の復讐を誓ひつゝ爾後の戦闘に奮勵したのである。

彼の獨語は實に操典に示す如く、火砲と共に死生を同じうすべき意氣を現せるものである。

戦友北上等兵が血染の國旗と共に、吉田伍長戦死の情況を其遺族に報じた第一分隊彈藥班長北上等兵の書翰は左の如きものであつた。

思ひもよらぬ吾一人 不思議に命長らへて

赤い夕日の滿洲に 友の塚穴掘らうとは

此の「戦友」の軍歌を思ひ出す毎にお知らせ致しませうと思ひつゝ、忙しさに紛れ本日迄延引何卒御許し願ひます。私は吉田上等兵とは昨年一ヶ年同じ第三班に而も同じ室に起居を共にし今回も又召集せられ同じ第一分隊で活躍して居たのです。

二月二十日植田師團長は遂に最後の通牒を發せられ併し支那軍は何等誠意ある回答をなさず我軍は止むなく敵を攻撃するに決し二月二十一日を期して一齊に總攻撃を開始したのです。二月二十二日 嗚呼我が池中分隊として忘るゝ事の出来ない日だ。此日午前十分隊は歩兵第三十六聯隊の或る大隊に配屬を命せられ雨と飛び來る彈丸の

中を物ともせず敵前三百米の地點迄前進したのです。陣地近く到着せんとした時敵彈は大架馬の頸部を貫通しました。馬は其の場に卒倒した爲に吉田他二名の者にて陣地迄約十米搬送せんとした時、敵は機關銃を以て益々集中遂に憎むべき一彈は吉田上等兵の頭部に命中したのです。吉田は其場に卒倒しました。其の時誰か「吉田がやられた」と大聲にて叫びました。直ぐに馳せつけ吉田………吉田と呼んだが其の時は既に答へぬ人となつて居りました。分隊長以下の顔色はさつと變り實に悲壯なる場面此れでは駄目だと直に心を勵まし砲車の結合を急ぎ必らず吉田の仇を取つてやらうと阿野少尉殿の號令にて各砲手は夢中で發射しました。

命中又命中、遂に敵機關銃四銃を破壊し歩兵の前進を容易ならしめて吉田上等兵の仇を完全に取り出すことが出来ました。

彈丸は全部打盡し、やむなく分隊は一時二千米後方の中隊本部迄日暮を待ち退ることになりました。吉田を擔架に乗せて中隊に歸り其晩は林班長殿池中分隊長以下通夜を

しました。

明る朝私等分隊の者は二、三名で僅かの暇を割き火葬に附し骨を拾ひ、穴を掘り丁寧にうめてやりました。

穴を掘る時又「战友」の歌「友の塚穴掘らうとは」を思ひ出し思はず涙が頬をつたひました。

同封の國旗は吉田が生前迄帽子(鐵兜)の中に入れて居たので頭部貫通の爲め血染となつたのですから永久に記念として残して置いて下さい。同じく同封の手紙は吉田が戦線へ出發前に忙さに紛れ其の儘持つて居たのでしやう。私しが代つて御送り致しますから御精讀下さい。分隊長殿は何時も慰問品とかビール酒等を分配する毎に「オイこれは吉田の分だぞ」と別に供へて置かれる其度毎に涙を新にせずに居られせん。若し無事凱旋しましたら一度御尋ね致したいと思つて居ります。吉田の所持品は分隊で責任を以て保管して居ります。

では之れで失禮致します。どうぞ皆々様御身大切に遊ばれます様に。

(遺族 父 吉田仙次郎 住所 同本籍地)

五三 死を以て顯はした通信手の責任観念

山砲兵第九聯隊第二大隊本部

故陸軍砲兵上等兵 勳八等
功七級 道場 正次

石川縣江沼郡南郷村字保賀ソ六九

道場上等兵(當時一等兵)は中隊の模範兵として上下の信望厚く、上海戦に於ては砲兵戦闘の鍵とも云ふべき通信に任じて居た。彼は責任観念旺盛であり、よく己の職責を自覺し、戦場に於ける其活動は儘に衆の模範であつた。就中二月十九日開北に於て大隊本部と第四中隊との電線切斷せられ、通信不能に陥つた當時の如きは、文字通り身を危険に曝して保線を完了したのである。越えて三月一日上海附近第三次攻撃に際し、大隊通

信班は其観測所推進のため孫家宅を出發した。午前七時二十分阿野少尉を斥候長とする観測斥候は、電話を後郭家宅に向ひ架設すべく命せられ急速前進を開始したが、敵弾は雨の如く前進容易ではなかつた。斥候は或は家に隠れ、或は壕に入りつゝ、被覆線を延伸し願家宅村端に達したとき、韓家塘方面約八〇〇米の前方より敵機關銃の猛射を受け、道場上等兵は腹部に貫通銃創を受けた。彼は通信線を握り締めた儘「残念、残念」と連呼しつゝ、轉んでは起き、起きては轉び「癢だ、線は良いか、俺は駄目だ。射撃開始に間に合はぬといけないぞ。俺に構はず前進しろ」と戦友を勵ました。彼は一戦友の腕に支へられ、起たんするも能はず「急げ急げ」と勵まして居たが、己の死期を悟つてか、微かながらも「天皇陛下萬歲」を唱へて倒れ再び起つことが出来なかつた。かくて彼は野戦病院に運ばれたが、其途中可惜勇士は軍醫の手厚き治療を受くる違もなく瞑目した。死に至る迄自己の職責を自覺し、砲撃開始の時迄に通信連絡を完成せんとした上等兵の忠誠は一般の模範とすべきである。

(遺族 父 道場庄太郎 住所 同本籍地)

第十一師團の部

五四 死するも猶毅然として銃を保持す

歩兵第十二聯隊第六中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 藤目三郎

香川縣大川郡鴨庄村一三五二ノ一

昭和七年三月三日午後四時頃、中隊が萬難を排して婁塘鎮南方敵本陣地を、其直前の水深を徒渉して攻撃するに方り、藤目上等兵（當時豫備役一等兵）は勇猛果敢先頭に在つて突入し、退却する敵に對し機敏に追撃射撃を行つた。更に續いて敵第二陣地に對し攻撃を命ぜらるゝや、彼は言下に他兵に率先して之に應じ新に現出せる敵の自動火器を射撃中、敵の一弾は胸部を貫通し、尙他の一弾は其背負袋に命中した。之が爲に其中に携帶しありし小銃彈三百六十發中の大半は破裂して上等兵の後頭部並背部を粉碎し、鮮血淋漓最も悲壯なる戦死を遂げた。然るに上等兵は依然伏射の姿勢をとつたまゝ、堅く銃を

保持し、後衛生隊之を收容するに方つても銃を離さすことが出来ず、已むなく衛生隊長は其十指を個々に折つて辛うじて其手から銃を取り離し得たのである。死するも尙攻撃せんとする意氣や旺んなりと云ふべきである。

(遺族 伯父 藤目佐助 住所 同本籍地)

五五 予が戦死の後は一兵に至る迄此國旗を身代りとして先頭に樹てて進

め

歩兵第十二聯隊第六中隊

故陸軍歩兵少尉 正八位 勳六等 功五級 三木恒太郎

香川縣綾歌郡富熊村八三七

昭和七年二月二十六日出動準備完了するや、第三小隊長たる三木少尉(當時特務曹長

は中隊長訓示の後を受けて部下一同に向つて言つた。「只今中隊長殿の御訓示にあつた如く予は一死以て君國に報じ敢て生還を期せず、されば予が戦死せし後は一兵に至る迄此國旗(大日本帝國歩兵第十二聯隊第六中隊第三小隊長三木恒太郎)と墨痕鮮かに記入しあり)を身代りとして先頭に樹立して奮戦力闘せよ云々」と。

三月三日午後一時三十分頃より中隊が婁塘鎮——嘉定道附近の敵を撃滅して師團の前進を容易ならしめんとするや、敵が常勝軍を以て誇る第十九路軍竝蔣介石直屬軍の我に數倍する兵力を以て堅固に守備しあるに遭遇し、奮戦力闘或は斃れ或は傷き悲惨なる戦場の光景を現出したが、少尉は彈丸雨飛の間に毅然として勇躍前進し、毫も之を意とせず能く部下を激勵して先づ敵の警戒陣地を奪取し、次で一舉に第一第二の陣地に突入し、戦闘將に局を結ばんとする頃、敵の一彈は心臟部を貫通した。豪勇無双の少尉も復起つ能はざるを知つて「天皇陛下萬歲」の一語を今生の名殘とし豫ての覺悟の如く、最も壯

烈なる戦死を遂げたのである。

(遺族 妻 三木ウメ 住所 香川縣大川郡譽水村四四〇)

五六 堅き信念に身命を捧ぐ

歩兵第二十二聯隊第九中隊

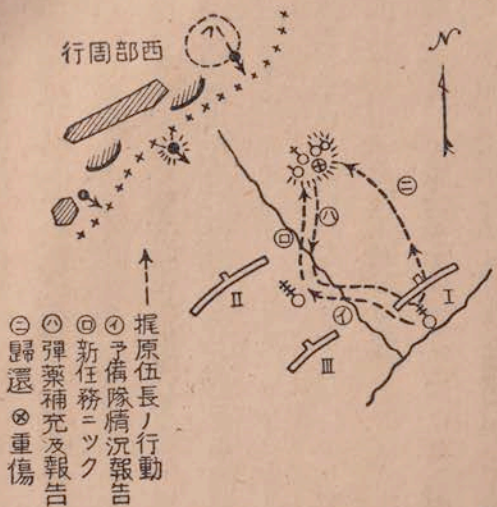
故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 梶原重之

愛媛縣喜多郡三善村大字春賀甲一五四〇

昭和七年三月一日周行附近の戦闘に於て第九中隊は大隊の左第一線として敵の堅固なる陣地を攻撃し、先づ東部周行を占領した。次で部隊を整理し敵の第二線陣地に對し攻撃を開始するや、西部周行東北端附近よりする敵の側防火猛烈にして中隊は十字火を蒙り、爲に豫備隊と中隊長間の連絡は困難となつた。此時豫備隊長は梶原伍長(當時豫備役上等兵)をして豫備隊の位置並状態を中隊長に報告せしめたが、彼は彈雨を潛つてよ

く任務を達成した。

當時中隊長は速かに敵側防機關銃撲滅の必要を感じ部署しようとしたが、第一線は死傷多く一兵にても多からんことを希つた



折柄であつたので、梶原伍長をも直にその任務に使用し、兵二名と共に白石軍曹に指揮せしめて其右側方面より敵を攻撃すべきを命じた。斥候は水濠を利用し迅速に右前方の堆土に進出して攻撃し有效なる射彈を送りつゝある時、敵陣地は其兩翼に掩蓋機關銃を有することを發見した。是より先、黒川軍曹の指揮する三名は同堆土右側を占領し、擲彈筒を以て之

を制壓中であつたが、斥候長は手榴弾缺乏せるを以て豫備隊より之を補充すべく、梶原伍長を豫備隊に歸し、途中に於て新なる敵情を中隊長に報告せしめた。伍長は敵猛射の中を迅速に馳驅し敵情を中隊長に報告し、中隊長をして爾後の前進及突撃準備に至大の利益を得しめ、次で豫備隊の手榴弾を集め、再び堆土に歸來し之を黒川軍曹に交付し、以て敵の側防火を全く撲滅するを得しめ中隊長の攻撃を著しく有利ならしめた。其後彼が白石軍曹の許に歸るべく疾驅し、漸く其地に至りし刹那敵彈の爲下腹部を貫通せられて重傷を負ひ、惜いかな三月十七日に至り遂に此勇士も再び歸らなくなつた。

伍長は出征以來危険困難なる任務あらば常に進んで之に服し最も勇敢且著實で、其攻撃精神旺盛にして責任觀念の強き、誠に軍人の模範であつた。従つて平素郷に在つても誠意よく青年の指導に當り、常に範を示して後輩を誘掖し、郷黨の崇敬を一身に聚めて居た。召集令狀を手にした時は病中であつたが驟然起つて「今迄鍛へた腕を振ふ時節が來た。愈々國家に一身を捧げる時だ」と喜び勇んで應召した。而して今や其堅き信念を

のまゝ、一身を皇國に捧げたのである。

(遺族 父 梶原祐八 住所 同本籍地)

五七 自重して有事に備へ、潔く死處を戰場に求む

歩兵第二十二聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等
功七級 神ノ倉重政

愛媛縣喜多郡大川村

三月一日周行附近の激戦に勇戦奮闘、遂に名譽の戦死を遂げた神ノ倉伍長(當時豫備役上等兵)は郷里に在つた時、村の道路工事に従事して居たが、日支の風雲益々急迫を告ぐるに至り、愈々報國の秋來るを豫期し、工事中萬一不慮の災厄の爲身體を損するところがあつては不忠此上なしと覺り、斷然此危険多き工事に従事するのを止めて、収入の減少を意に介することなく他の工事に轉じた。斯くて彼は家事を整理し竊かに遺言を認

めて之を日常用ひし枕に收め、只管奉公の機を待つ内遂に動員下令となり、平素の念願叶ひ欣然として應召し、野戦隊に編入せられ、思ふ存分奮戦して遂に戦場の花と散つたのである。

其在郷軍人としての責務の重大なるを自覺し、我が身は 陛下に捧げたるものなることを思ひ、よく自重して潔く死處を戦場に求めた彼こそ眞の軍人であると謂はねばならぬ。

(遺族 父 神ノ倉惣次郎 住所 同本籍地)

五八 此母にして此子あり

歩兵第二十二聯隊第十中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 島内定治郎

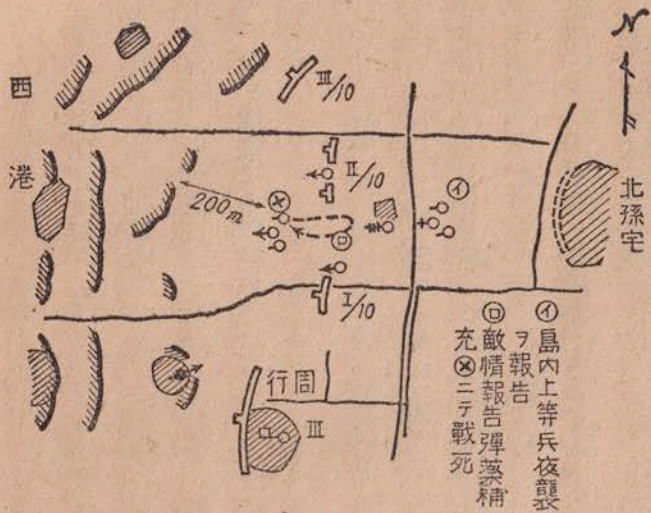
愛媛縣北宇和郡日振島村二番耕地七三五ノ一

下元旅團長の指揮下に入り其右翼隊となつた第三大隊の、中央第一線であつた第十中隊は二月二十九日金母宅西端で第三次の攻撃を準備した。此夜島内上等兵(當時一等兵)は駐止斥候となり、北孫宅西方三百米の一軒家で警戒に任じてゐると、午後九時頃約十名の敵襲があつたが直に之を撃退した。十時頃再び約百名の敵襲を受けたので、彼は敵彈雨飛の中を機敏に中隊長の許に報告し、中隊をして速かに戦備を整へ之を撃退するを得しめた。

三月一日の攻撃には彼は第一線小隊輕機關銃分隊の彈藥手として奮戦中特に敵の側防機關を迅速に發見した。敵の射撃は猛烈で僅かの移動も危険であつたが彼は勇敢にも中隊長の許に至り、よく沈著して敵陣地特に障礙物、側防機能の状態等を詳細に報告し、中隊長の爾後の戦闘指導に大なる貢獻をなした。彼は報告を了るや直に分隊に復歸し續いて奮戦したが、彈藥缺乏するに及び勇躍して其補充に當り、遺憾なく銃の威力を發揮せしめた。中隊が將に突撃に移らんとした時不幸にして敵彈頭部を貫通して壯烈なる戦

死を遂げたのである。

上等兵は人となり謹厳にして平素よく軍務に精勵し、上下より敬愛せられて居た。動員下令に方つても彼は「年末の休暇歸省の際既に父兄とは訣別して來たから」として故郷には何等の通知もしなかつたが、動員を知つた兄は無理に母に勧めて面會の爲兵營に到らしめた。彼は在隊間の貯金を差出した。母は「お前が僅かの給料の中から貯めた金は勿體ない」として受けず、却て餞別として兄弟から贈られた十圓を彼に與へんとした。すると彼



は「戦争に行くに金は要りません、是非此貯金も納めて下さい」と母に與へ、「其代り折角の志なれば御餞別の金は半分だけ載せて出征記念の爲お母さんと共に寫眞を撮りませう」と言つた。すると母親は聲を勵まし「寫眞を戦地へ携へ、母の姿を見て、若しや卑怯の心でも起すことがあつてはならん。萬一にも無事で凱旋も出來たら其時こそ良い記念だから撮らう」と凛たる母の教訓に上等兵も感激した。そこで彼は「昨日も中隊長殿から肉弾三勇士の話聞き覺悟は決めて居ります。私が戦死したことを聞かれたら三勇士に負けぬ働をしたと喜んで下さい」と答へた。其言葉を聞いた母は尙も彼を戒めて「お前の覺悟は承知しました。だが死ぬ許りが忠義ではない。併し乍らお前の身體は天子様に乗げた身體だから死に甲斐のある働きをして三勇士に優るとも劣らぬ最期を遂げる様頼みます」と。子を思ふ親、親を思ふ子、互に今生の別をして彼は勇躍征途に上つたのであつた。上等兵の戦地に輝く武勳は又母の教訓に負ふ所が多い。眞に此母にして此子ありと謂ふべきである。

上等兵の郷にあるや夙に模範青年の名があつた。飲酒の弊風殊に甚だしき環境に生れ、而も宇和島市に出て酒醸家の倉男として働きながらも断じて其弊風に染まらず、身を持する頗る謹直であつて主家の信頼も非常に厚かつたと謂ふ。以て勇士の日常に於ける半面を知るべきである。

上等兵の伯父も島内定治郎と呼び日露の役に出征して名譽の戦死を遂げた勇士であつたが、當時其一家は素より同氏の生還を期せず、一死殉國を以て一門の光榮となし、其後幾何もなく生れた甥に對し此名を襲がしめた。上等兵は即ち此甥である。以て一族擧つて義勇奉公の念に満ちて居たのを察すべきである。

上等兵は實に生れながらにして戦死せる伯父の名を貰ひ、此奉公心厚き家庭に養育せられて來たのである。長ずるに及んで戦場に臨み、赫々たる武勳を樹て、今日の壯烈なる戦死を遂げたのも決して偶然ではあるまい。

彼の兩親は今日猶健在し兩兄及弟妹あり、漁業を營み其家計は豊かではないが一家は

極めて圓滿であり、近隣の風評も極めて良好、今日復一兒を失つたが更に屈せず、再び同家より獻身殉國の士を出したるを光榮とし、更に近く生れんとする甥に對して重ねて定治郎と名づけんとすると聞く。今や浮薄輕佻の徒多きが中に、三千年來の武夫道其儘の我が島内上等兵一家を見ては、誰か己を省みて忸怩たらざるものがあらうか。

(遺族 兄 島内長太郎 住所 同本籍地)

五九 戦場の勇士は孝子の門より出づ

歩兵第四十三聯隊第九中隊

故陸軍歩兵伍長勳七等
功七級 湯 淺 治

徳島縣那賀郡延野村字松ノ久保八五

湯淺伍長(生前豫備役上等兵)は早く父に死に別れ、母一人の手にて養育せられて居たが、孝心深き彼は徴兵検査に合格し、昭和五年一月入營と決定するや、入隊後母一人に

ては定めし何かと不自由を感ずるであらうと、閑々に不在中使用する薪を集め、遂に二二年間の使用に支障なき量を集積したのである。斯くも孝心深き彼は村の模範青年として郷人の敬愛を受け、入營後も成績常に拔群にて伍長勤務上等兵となつて故郷に錦を飾つて除隊したのであつた。

偶々上海事變起り召集令狀に接するや、伍長は勇んで應召し、歩兵第四十三聯隊第九中隊に編入せられ、第三小隊第五分隊長を命ぜられた。彼は雀躍して喜び「日頃の腕前を試す時だ」と言つて出征した。

昭和七年三月三日第九中隊は左大隊の最左翼中隊として嘉定に向つて攻撃前進中、所屬第三小隊は午後一時三十分頃敵の前進陣地を攻撃した。該陣地は村落内に巧に遮蔽せられ、抵抗頗る頑強で中隊主力正面をも側射する状況であつたから、中隊の攻撃は頗る困難を極めた。伍長は此有様を見るや敢然として敵の十字火を冒し、獨斷逐次敵の側背に移動して敵前五十米附近の堆土に陣地を占領し、其輕機關銃を以て敵を側面より猛射

した。之が爲敵は動搖を始め一部は退却を開始し、小隊の猛攻と相俟つて敵を撃退することを得た。伍長が更に追撃前進に移らんとする刹那、右側方よりする敵彈の爲右胸部に貫通銃創を受けた。彼は一時其場に倒れたが尙も之に屈せず手を前方に振つて部下分隊に前進を命じ、飽く迄で指揮を續けんとして居た。併し乍ら致命的深傷は遂に彼に生命を藉さず、臆て名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

伍長は郷に在りては良民として孝養を第一とし、入隊するや一意軍務に精勵し戦友との交際も厚く、學術は最も優秀であり、偶々出征するや勇敢機敏に行動して中隊戦捷の基を拓き、以て良兵たるの實を擧げたのであつて、實に國民の龜鑑として永後に後輩を訓へ導く所多大なるものがあらう。

(遺族 母 湯淺カツノ 住所 同本籍地)

六〇 果斷敵の自動小銃を奪取し、更に奮戦一死克く重任を果す

歩兵第四十三聯隊第二中隊

故陸軍歩兵中尉

從七位
勳六等
功五級

平野 秀夫

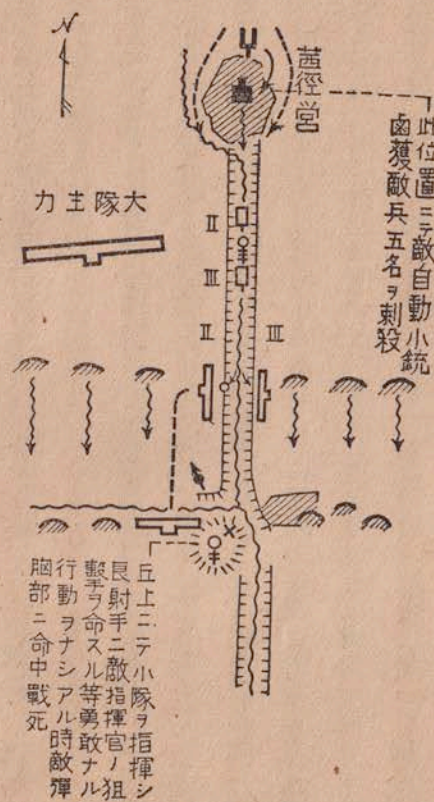
徳島縣板野郡撫養町小桑島一〇〇

平野中尉(當時豫備役少尉)は大正十五年十二月一日幹部候補生として歩兵第四十三聯隊に入隊し、昭和五年三月三十一日歩兵少尉に任せられた。資性温厚篤實、沈毅果斷、繁忙なる家業の傍らに郷軍人會や青年團等の指導に心血を濺ぎ、郷黨の信望厚く、深く敬愛せられて居た。彼は昨年六月分家して新妻を迎へ、製鹽業を營み其事業も漸く緒に就かんとする昭和七年二月二十四日、突如充員召集令狀を受けた。彼は令狀を手にすると共に家業を抛つて直に聯隊に駆けつけ、野戦小隊長として出征を懇望し、第二中隊小隊長要員に充當せられることを承知するや、欣喜雀躍措く所を知らず、中隊長に面會を求めて小隊の編成其他出征準備に付打合せを爲し欣然として歸宅した。

應召後彼は小隊の編成其他に能く積極的に中隊長を輔佐して諸般の業務に努力し、部下小隊の兵員に接觸して其實情を知る等熱心に軍務に勵んで居た。彼は幹部候補生時代の教官であつた神保大尉に己の戦死後の事に關し家庭の實情を打ち開けて依頼する等、既に生還を期する所がなかつた。人に接しては「軍人が戦場に臨む、正に一死殉國あるのみ」と大笑するを常として居た。

三月一日七了口に敵前上陸を了したる聯隊は行く往く所在の敵を掃蕩しつゝ、儀橋に達し、次で菑徑營を経て瀏河鎮に向ふに際し、中尉は尖兵長として其最先頭に在つて前進したが面上愉快の情が溢れて居た。午後二時二十分頃菑徑營北端に達するや、尖兵を城外に留め自ら先行して城内に進入し、具に城内の状況を視察したる後「尖兵は獨力城内の敵を撃退し速に南側城壁を占領するを以て、主力は城の西側を通過するを可とす」との報告を出し、自ら毅然として先頭に立ち、尖兵群之に續いて城内に驀進した。斯くして城内市街中央附近に於て自動小銃を有する約二十名の敵と遭遇するや、機先を制して

直に之に突入し、敵をして應戦の遑なく、自動小銃一を我が手に委して南方に逃走するの止むなからしめた。此沈著にして果斷、機を見るに敏なりし動作は部下一同の敬仰措かざる所であつた。



たる後、南部城壁を占領して浪息喬西側に陣地を占領せる敵を制壓して、大隊の展開を容易ならしめた。當時大隊主力方面は地形平坦且水濠横はるのみならず、敵の重機銃及小銃彈甚しくして前進困難なるを豫想せられたので、中隊は更に前進して敵陣地

の弱點たる無名水濠に沿ひ敵陣地の中央を突破して其主力の後方に進出し、大隊の前進を容易ならしめんとし、城壁を捨て、前進するや、中尉は右第一線小隊長として部下を激勵しつつ、勇猛果敢に前進を繼續して敵陣地の中央後附近に進出し、其西側方面の敵に對し側射及背射を浴びせ、敵をして周章、多數の武器彈藥及死傷者を遺棄して逐次退却するの止むなきに到らしめた。而して之が追撃前進中苗徑城南方約七百米水濠に沿ふ丘阜上に於て、胸部に貫通銃創を受け復起つ能はざるを知るや、遙か東方に向ひ「天皇陛下萬歲」を唱へ、終ると共に從容として死に就いたのである。

其沈著果敢にして至誠盡忠の念厚きは誠に軍人の龜鑑であつて、平素から至誠殉國の念に徹して居るものならば、此の如く欣然として任務に斃るゝことは到底なし得る所でない。

(遺族 父 平野伊之太 住所 同本籍地)

歩兵第四十三聯隊第三中隊

故陸軍歩兵伍長勳八等
功七級 大岩 春次郎

德島縣勝浦郡多家良村大字飯谷

故陸軍歩兵上等兵勳八等
功七級 坂 東 安 一

德島縣名東郡上八万村

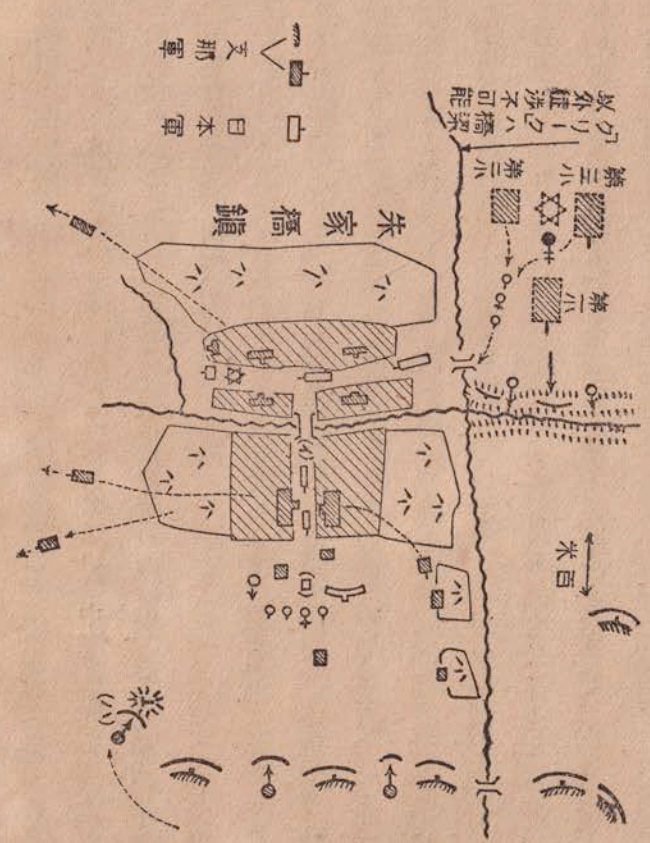
故陸軍歩兵上等兵勳八等
功七級 喜 多 頼 明

德島縣三好郡佐馬地村大字白地

上海戰鬪の終り頃第九師團正面の支那軍が續々と退却を始め、第十一師團主力は七了口敵前上陸後矢繼早に敵の退路に殺倒した。丁度三月三日嘉定北方二里餘の朱家橋鎮附近に於ける第三中隊の戰鬪の際のことである。中隊は當時旅團豫備として婁唐鎮の戰鬪後嘉定に向ひ前進中であつた。豫備隊と云ふものゝ前進地區は皇軍の始めて進入する所

であり、退却中の敵の部隊が大小群をなして其處此處に潜在出沒するのである。情況不明は戰場の常とはいひながら、此時の如き甚しきはない。中隊は敵陣地前方五、六百米の村落で一戰鬪後の休憩をなし晝食をした程で、時折四周の村落から敵の射撃を受けたが、斥候を出しても一向判明せぬ。

午後二時半頃中隊は疎開隊形をとつて前進を開始した。「進路上に斥候を出せ」との中隊長の命令で、小隊長の命を待つことなく聲に應じて跳び出したのが大岩伍長(當時豫備役上等兵)、板東上等兵(當時豫備役一等兵)、喜多上等兵(當時豫備役一等兵)の三名である。斥候がイの橋梁附近に差しかつた時、俄然四周の家屋から射撃を受けた。斥候長は駆歩を令し、全員早駆でロ附近に進出した。丁度三、四百米前方で待ち構へて居た敵はロ附近の市街の出口に集中射撃を始めた。此時中隊の尖兵は殆ど斥候に引續いて前進中であつた爲、大岩は振り返つて尖兵長に前方の敵情を報告し、直に散開して射撃を始めた。直後の家屋からも盛んに彈丸が飛んで來るので彼は單身屋下に匍ひ寄り手榴彈



を投じて之を沈黙せしめた。此時脚部に一弾を受けたが尙も、射撃を續けて居る。板東は「家^(イ)に火をつけよ」と後方に振り返つて叫んだ。彼も亦一弾を受けて居つた。喜多は擲弾筒手であつた爲、側近の兵から手榴弾を集めて前方の敵を射撃し始めたが、後方家屋より射撃を受けるので反轉して其家を狙ひ射ち、一弾は見事命中して其敵を沈黙せしめた。其頃^(ハ)附近の墓地に敵が現れたのを見た板東は「小隊長殿右にも敵が」と報告し、其語盡さざる内に第二、第三弾は彼の頭部に命中し、大岩も前方の敵を射撃中板東と前後して「天皇陛下萬歲」の聲を残し共に名譽の戦死を遂げた。喜多は身に數弾を受け辛うじて擲弾筒の射撃を續けて居つたが、之も亦名譽の戦死を遂げた。板東の如きは身に七發の小銃弾を受けて居つた。

此斥候の勇敢なる行動に依り尖兵の^(ロ)附近に於ける戦闘及此間中隊主力の^(イ)附近市街内の敵掃蕩を容易ならしめたるのみならず、敵中に在つた旅團司令部を安全ならしむることが出来たのである。

斥候の戦死した附近に刺殺せられた敵の死體が二個あつた。誰が之を刺殺したのか、生存者には誰も覚えがない。恐らく斥候が最初(口)に進出した時家屋内より逃げ出した敵と格闘したものでなく、三名の奮闘を物語るものであつた。

戦場の勇者は平素から積極的に任務を果して居た者に多い。右の三名の如きは儘に其好適例であらう。即ち現役在隊間は共に中隊の模範兵として萬人の齊しく認むる所であつた。就中板東の如き、日曜休日には自ら進んで中隊の諸使役に服するのみならず、嘗て入營前奉公せし舊主家の人手少く困却せるを聞知し、兵營より三里餘もある小松島の主人宅を訪れ、歸營時間に至る迄家事を手傳ふこと數回に及んだ。爲に近隣の人々は「安一さんは満期除隊した」と思ひこんだ程で、事の真相を知り其誠心に感激し、誰云ふとなく地方の風評となり遂に當局の耳にも入り、軍部及地方側の一致表彰する所となつたことがある。隊内に於ても聯隊一同整列の前で模範兵として表彰せられたことが二回にも及んだ。

寅四六

大岩、喜多も之に優るとも決して劣らざる兵で三名共に温順謙讓で、平素はごちらかと云へば温厚過ぎると云ふ程の、眞の模範兵であつた。其平素の行動と戦場の勇戦とを照し合はすに決して偶然事ではないのである。

尙又感激すべきは其遺族である。凱旋後中隊長が訪れた時に涙一つ落す者もなく「息子は何か卑怯な行ひでもありはしませんでしたか……早く戦死して何の御役にも立ちませんで申譯ありません」などと挨拶せられた。

此家族、此銃後ありてこそわの奮戦もあり得たのであらう。

(遺族 父 大岩官太郎 住所 同本籍地)

(遺族 父 板東榮吉 住所 同本籍地)

(遺族 叔父 松下宇平 住所 同本籍地)

六二 瀕死の重傷を受け、敵弾下に從容任務の申し送りを了つて瞑目す

歩兵第四十三聯隊第九中隊

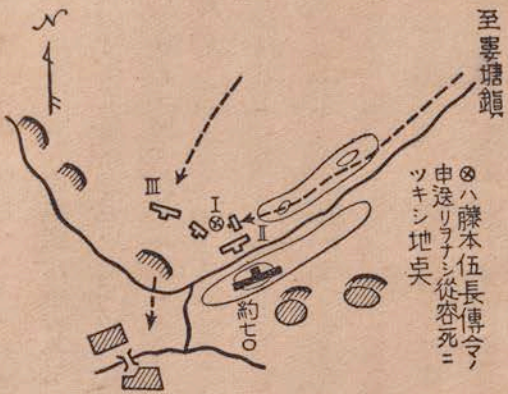
故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 藤本宗太郎
 徳島縣三好郡山城谷村國政名五二七

七了口の敵前上陸に成功した歩兵第四十三聯隊は疾風枯葉を捲くが如き勢を以て敵の背後に迫つたが、昭和七年三月三日婁唐鎮に於て敵の收容陣地に遭遇した。

此日尖兵中隊であつた第九中隊が微弱なる敵を攻撃して前進中、其豫備隊が婁塘鎮西南端に達した時、自動火器を有する二十名内外の敵より不意に急襲的射撃を受けた。豫備隊は直に此敵を攻撃したが其實兵力は輕機關銃二箇分隊と小銃兵二名に過ぎず、敵は丘阜を利用して頑強に抵抗し、攻撃は意の如く進捗しない。

此時藤本伍長(當時上等兵)は中隊長の傳令であつたが、敢然として前進し「敵弾は中るものか、行くぞ!」と呼んで突撃前進に移つた。伍長の果敢なる動作に勵まされた他の傳令も飛彈を冒して突撃に移り、遂に敵を潰走せしむるに至つた。

同日午後一時更に敵を追撃して朱家橋鎮の敵主陣地の攻撃に移り、第九中隊は聯隊の



最左翼第一線として正面攻撃に任じた。伍長は此時も傳令の任務に服して居たが第一線に加入して射撃中不幸にして敵弾に左頸部盲管銃創を受けた。

伍長は自ら其致命傷なるを悟り戦友大倉一等兵を招き、敵弾下に從容として中隊長の私物品を取り出し「是だけある。員數は確に申し送つて置くぞ」とて一々調べて完全に之を申し送り、又「俺は傳令だ、あとの任務を頼んだぞ」と告げた。此時中隊長が急を知つて駆けつけた。彼は中隊長に向ひ「全部大倉に申し送りました……水を……」とて任務の申し繼ぎを報告し、最期の水を求めた。中隊長は百方激勵しつゝ、最早生命の保ち難さを知るに及び、水筒の水を

彼の口に當てがった。彼は眼をグット見開きつゝ、「中隊長萬歳々々」と微かに連呼し乍ら瞑目した。

彼が死生の境に徨ひつゝも尙敵弾下に悠々として任務の申し送りをなした其責任觀念の強きは實に軍人の龜鑑たるのみならず、温い中隊長の腕に抱かれつゝ、中隊長の武運長久を祈つて欣然と逝いた其最期は、古武士の戦場に於ける忠烈美談を凌ぐ麗はしき敬上の發露と云ふべきである。

(遺族 父 藤本福太郎 住所 同本籍地)

六三 血達磨となつて奮戦し、小隊の危急を救ふ

歩兵第四十三聯隊第九中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 清水 繁 夫

徳島縣板野郡板西町吹田字袖木四三

昭和七年三月三日上海會戦の末期に近く婁塘鎮附近の敵陣地攻撃の際、清水上等兵(當時一等兵)は第三小隊に屬し、中隊の右第一線として敵の警戒陣地を奪取し、次で前進陣地の攻撃に當り、前進又前進、遂に敵前二百米に近接した。該陣地は本陣地前の村落内に巧に遮蔽して構築せられ、敵の抵抗頑強にして、加之中隊正面を側射するを以て中隊の攻撃は頗る困難なる情況であつた。之を看破した清水上等兵は輕機關銃分隊に掩護を依頼し、自ら率先々頭に立つて身を挺して敵陣に躍り込み、忽ち敵兵二名を刺殺した。彼が其返り血を浴び乍ら血達磨の如くなつて縦横無盡に奮戦した様は、眞に阿修羅王の荒れ狂ふが如く、敵は此勢ひに當るを得ずして遂に潰亂するに至つた。彼は尙も敵を急追せんとするや、村落内に潛伏して居た敵が、小隊の攻撃を阻止せんとして急霰の如き射撃をなした。之を目撃した彼は烈火の如く憤り、暫し當面の敵に對する追撃を止め、敢然家屋内に突入し、手榴弾を投じて此敵をも撃滅し小隊の危急を救つたのである。併し乍ら身鐵石にあらざる彼は、敵本陣地よりの一彈を前額部に受け「分隊長殿やっ

つけて下さい」との一語も細く悲壯なる最期を遂げたのである。時に午後二時。上等兵の勇敢なる行動、其犠牲的精神の發露は幾多小隊將兵の危急を救ひ、縦令彼は江南の大和櫻と散つたとは謂へ、其芳名は永久に皇軍將兵の記憶に残るであらう。

(遺族 父 清水卯太郎 住所 同本籍地)

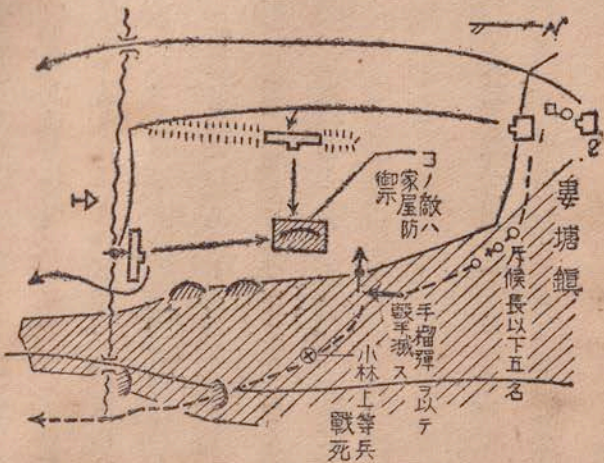
六四 看護は要りません、早く任務を續行して下さい

歩兵第四十三聯隊第一中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 小林 清美

徳島縣三好郡加茂村字中村

昭和七年三月三日朝のこと、上海會戰末期の追撃間、婁塘鎮の西端に聯隊の第二線であつた第一大隊が前進して來た時、眞横二百米位の村落から不意に機關銃、小銃の側射を受けた。



丁度大隊の左側警戒の任務を以て前進中の伊賀軍曹の指揮下にあつた小林上等兵(當時一等兵)は飛び來る敵弾の中を部落内に躍り込み、家屋の中に敵の機關銃があるのを發見した。彼は斥候長に向つて「分隊長殿！早くやらないと大隊が大損害を受けます。これです」と言つて手榴彈を取り出した。斥候兵も皆手榴彈を握つた。分隊長が「ヨシやれ」と叫ぶや爆音凄しく黒煙が上つた。敵の機關銃は沈黙し、機を失せず突入した斥候長以下の劍尖に敵兵三名は斃された。かくて斥候は更に進み三尺許りの間道を右に折れた頃、何處

からか飛來した敵弾は小林上等兵の腹部と臀部に命中した。彼は「やられた！」と言ひ乍らごつと許りに倒れた。

此情況を見た戦友山田一等兵は「小林しつかりせい、大丈夫だ」と駆け寄つて看護しようとする、上等兵は「分隊長殿看護はいりません。早く／＼任務を續行して下さい」と却つて戦友を勵まし「萬歳！ばんざい………」と萬歳の途中にて遂に絶命した。

上等兵が死の間際にも従容自若として大局の爲己を顧みず、只管君國につくした犠牲的精神は皇軍の華として後昆の鑑とするに足る。

(遺族 父 小林長太郎 住所 同本籍地)

六五 孝子の奮戦

歩兵第四十三聯隊第二中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 小川 一男

徳島縣板野郡北灘村大字櫛木村字中末

小川上等兵(當時一等兵)は資性温厚篤實であつて孝心深く、常に隊務に精勵して居た。昭和七年二月二十六日動員も完結し、彼は面會に來た懐しき母と久方振りに對面し盡きぬ名残を惜んだが、彼は固より生還を歸せずと深く決する所あり、平素の給料を貯蓄せる通帳を母に渡し、且母の差し出した温情の籠れる十數圓の餞別をも「死する身に多くの金は不必要です、何卒お母さんの小遣にも」と固く辭して之を受けず、却つて懇々母を慰めて歸らしめた。

彼が第二小隊の福井分隊に屬し、勇躍征途に上つたのは數日の後である。

越えて三月一日聯隊が敵を追撃して儀橋より前進するに當つて、彼は尖兵の斥候として聯隊の最先頭にあつて前進した。同日午後二時三十分頃茜徑營城内を搜索しつゝ、通過中約二十名の敵と俄然衝突するや、彼は斥候長に續いて決然之に突入し、敵をして死體五を残して南方に潰亂せしめ、自動小銃一を鹵獲し、中隊の茜徑營占領を速かならしめ

たのである。

爾後苗徑營南側地區に陣地を占領せる敵に對する攻撃に當つては、彼は山下軍曹の分隊に屬し、散兵線の一員として彈雨を潛りつゝ、勇敢に前進又前進、敵を壓倒して其第一線を突破し、次で第二線陣地前百米に近接して戦闘を繼續中、分隊長が足部に敵彈を受けて轉倒した。此様を見た彼は敵彈降り注ぐ中を危険を顧みず分隊長に駆け寄つて應急手當を施し、山下軍曹をして分隊の指揮を繼續せしめた。突撃直前の緊要時期に於ける此動作は我が軍の志氣を保ち、火力の發揚を倍加せしめ突撃奏效の因をなさしめたのであつた。彼は突撃に當つて白兵を振つて奮戦し、更に射撃によつて敵を制壓中、右側方よりする敵の機關銃彈の爲腰部に穿透性貫通銃創を受けて倒れた。日没後彼は戦線を退き衛生隊に收容せられたが、軍醫の手厚き治療の甲斐もなく、翌二日午後十時三十分澗河鎮衛生隊に於て遂に護國の神となつたのである。

彼は平素より孝心深く而も大義の爲に斃れたのであつて、其忠孝兩全なる英靈は永久

に皇國鎮護の神となつて居るであらう。

(遺族 母 小川ツチ 住所 德島縣板野郡撫養町齊田一丁目岩崎五一)

六六 身を以て師團長の危急を救ふ

歩兵第四十三聯隊第十一中隊

故陸軍歩兵上等兵 勳八等
功七級 阿 佐 樂 一

德島縣三好郡井内谷村一二四

昭和七年三月一日寒風膚を刺す朝まだき、七了口の敵岸に小隊長と共に率先勇敢に上陸したのは阿佐上等兵(當時豫備役一等兵)であつた。

爾後第二小隊は師團司令部の警戒に任じ、上等兵も其護衛兵として不眠不休の活動を續けた。三月三日婁塘鎮附近の激戦の後師團は嘉定に向つて敵を追撃したが、彼は師團長を護衛しつゝ、司令部の先頭にあつて前進した。かくて偶々師團司令部が婁塘鎮南方に

達するや竹林中に潜んで居た敵の敗殘兵が不意に司令部に集中火を浴びせ、死傷者も相續いで出で、師團長の身邊も亦一時非常な危険に瀕した。此時上等兵は身を以て長官を救はんとし、率先戦友を激勵し、敵彈の下で最も勇敢に行動した。然るに敵は豫想外に頑強で中々退却しない。斯くては師團長の身に如何なる事が起るやも知れないと思つた上等兵は遂に意を決して敵中に突入して之を掃蕩せんとし、將に突撃に移らんとして身を起した瞬間、敵彈は彼の頭部に命中し、遂に長官の楯となつて壯烈なる戦死を遂げたのである。赫々たる第十一師團の戦功の蔭には此貴き犠牲のあつたことを記憶して居なければならぬ。

(遺族 父 阿佐半造 住所 同本籍地)

六七 銃側を墓場とします

歩兵第四十三聯隊第二機關銃中隊

故陸軍歩兵伍長 勳八等 功七級 佐藤 重喜

徳島縣板野郡應神村

佐藤伍長(當時豫備役上等兵)は性温厚篤實、義務心頗る旺盛、其上孝心厚く夙に郷黨青年の龜鑑であつた。従つて先輩よりは將來を囑望せられ、後輩よりは敬慕の的となつて居た。

彼は入營の前々日父を失つたのであるが、速かに父の葬儀を了つて入營し、爾來一意専心軍務に精勵し、在營間は常に中隊の模範兵となり、選ばれて下士官候補者教育の助手を命ぜられた。以て當時に於ける彼の成績を察知すべきである。又彼は在營間軍務の餘暇を得ば、僅かながら土産物を携へて歸省し老母を慰めるのが常であつた。

昭和七年二月二十三日の夜半、突如として第十一師團に動員を命ぜらるゝや、伍長は神戸に出稼中であつたが直に出先の業務を整理し、其日正午神戸出帆の連絡船で急ぎ自宅に歸り、應召の前夜を老母との盡させぬ話に送つて最後の孝養を盡し、午前四時別れ

の盃を交し勇躍應召した。

三月一日七了口敵前上陸の際、伍長は機關銃手として第一回上陸部隊たる大寺大隊の最先頭に上陸することになった。江岸に陣地を占領して居る敵は我が舟艇の近迫を知るや猛烈なる射撃を開始し、彈丸はしきりに頭上を掠めたが、勇敢なる伍長は艇首に在つて沈著に射撃準備を整へ、引鐵に食指をかけ射撃開始の命令を今や遅しと待ち受けて居た。敵前五百米……四百米……三百米……敵影は愈々明瞭となつた。其時射撃開始の合圖たる指揮艇よりの射撃が開始せられた。分隊長の號令は下つた。伍長は落ち著き拂つて照準を定め射撃を開始した。敵は此正確な機關銃の猛射に忽ち動搖を來し、算を亂して敗走を始めた。舟艇は驀進し、小銃部隊は勇敢に跳び込み一舉に敵陣に突入した。沈著正確なる射撃を續けてきた伍長も亦分隊長の號令と共に將に舟より陸岸に跳び下りんとした刹那、不幸敵彈は伍長の左頸動脈を切斷し、遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

此くして佐藤伍長は師團最初の犠牲者となつた。併しその死は克く右第一線部隊たる大寺大隊の上陸成功の動機を作り、延いて師團全般の上陸戦鬪を有利にしたのであつて、其勇猛果敢なる働きこそ誠に皇軍の華として永く傳ふべきである。

伍長が如何に盡忠報國の赤誠に燃え一死殉國の念に強かつたかは、戦死十六時間前在神戸の義兄山口氏に宛てた次の手紙の一節(原文の儘)を見ても明かである。

四三聯隊は師團の先遣隊にて第一番に上陸し師團の到着を待つて敵の背後に迂回總攻撃をなす豫定なり自分は機關銃中隊に編入され銃側(機關銃の側の事)を墓場とし生きては再び神戸の地はふまない覺悟なり皆んなに手紙出せない皆々宜しく御傳を乞ふ
天皇陛下萬歲々々後は後便にて

二十九日午後一時〇分 支那揚子江下流にて 佐藤重喜

伍長の一死以て國に酬ゆる悲壯な覺悟の程も窺はれるではないか。伍長戦死の悲報一度郷黨に傳はるや、人々は皆彼の母を見舞つた。然るに老母は來訪者に對し涙一滴こぼ

すことなく「不束ながら御國の爲に御役に立ちました事は、我が家門の爲名譽此上もないことでありませぬ。出發の前夜十分に話もし、覺悟も致して居りましたので何も心残りはありません」と言つて、心から我が子が名譽の戦死を遂げたのに満足して居た。誠に此母ありて此子ありと謂ふべきである。

(遺族 兄 佐藤文三郎 住所 同本籍地)

六八 敢然艇首に立つて激闘し、重傷に屈せず指揮を續く

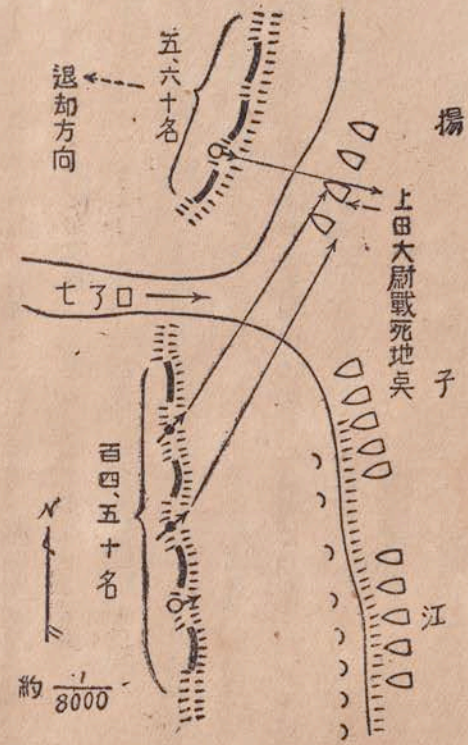
工兵第十一大隊第一中隊

故陸軍工兵大尉 正七位 勳六等 功四級 上田 銈 藏

新潟縣岩船郡村上町二二七一

上田大尉(當時中尉)は第十一師團に動員令が下つた時、特に簡拔せられて派遣工兵中隊の小隊長となつて出征した。師團は敵前上陸を敢行すべき情勢にあるを知り、師團平

素の訓練を發揮すべきは實に此秋であると勇躍し、眞に死を期して任務を達成し以て君恩の萬分の一に酬い奉らん事を誓つて居た。



必勝を期したのである。

三月一日未明師團

が揚子江畔七了口附近に敵前上陸を敢行するに方り彼は水上作業隊に配屬せられ、右第一線艇隊長となるや、終夜一睡もせず綿密周到に萬般の準備を整へ以て

同日午前五時三十分上陸開始の命令と共に、第一回上陸部隊舟艇群を指揮し、七了口北岸に向ひ前進中距岸四、五百米に達した時、敵機關銃及小銃の猛火を蒙つたが大尉はよく沈著して部下艇隊を掌握し、豫定上陸地點に向つて驀進した。彼の舟艇の向つた地點は遠淺であつて距岸約百米の所より舟底は河底を擦り意の如く進むなかつたのみならず、遂に十數米の所にて舟艇擱坐するの止むなきに至つたのである。此に敵彈益々集中するや大尉は敢然軍刀を抜き艇首に立ち、乗艇部隊を鼓舞激勵して上陸を促しつゝ、あつた。會々敵彈頭部に命中するも尙屈せず叱咤指揮し竟に斃るゝに至つた。乗艇部隊は此壯烈なる行動に感激して直に勇躍、跳込上陸を決行し、以て河岸に師團上陸の第一據點を占領するに至つた。

此敵前上陸に於ける大尉の行動は眞に軍人の龜鑑にして、軍司令官より感狀を授與せられ其武勳を表彰されたのである。

(遺族 妻 上田靜子 住所 香川県仲多度郡筆岡郡村大字弘田)

六九 通信手重傷を受けて人事不省に陥るも巻框を堅く握つて放さず

第十一師團通信隊(歩兵第四十三聯隊第十中隊出身)

故陸軍歩兵上等兵 勳八等 功七級 佐野 武雄

徳島縣三好郡晝間町大字晝間二九四五ノ一

昭和七年三月三日婁塘鎮附近の戦闘に於て、第十一師團通信隊の一部は師團司令部と歩兵第二十二旅團司令部との通信連絡に任じ、該旅團の前進と共に既設の通信線を撤收しつゝ之に追及した。

此時佐野上等兵(當時一等兵)は猛烈なる敵火を物ともせず勇敢に線を巻き乍ら走つて行く。之を見た小隊長は「危い!こちらへ来い」と頻に呼んだが、上等兵は少しも耳を傾けずに撤收を續けた。時しもあれ、空を切つて飛んで来た一彈は上等兵の腹部を貫通した。責任觀念の旺盛なる彼は尙も屈せず、創痕を裏んで線を巻き續けてゐたが、遂に負傷の痛手に堪へかねて巻框を抱いたまゝ、人事不省に陥つた。斃れても猶巻框を放さざる

は平素の訓練の結果であるとは云へ、又以て上等兵が通信手としての責任を感じて居た
實證であつて、眞に通信兵の龜鑑と謂ふべきである。彼は戦友中野一等兵の獻身的友情
によつて敵弾の死角内に收容せられたが、「残念だ！」と叫びつゝ、戦友の腕に堅く抱かれ
たまゝ、護國の神と化したのである。

(遺族 父 佐野源八 住所 同本籍地)

源八



2000